
大日本窯業協会・工政会の倉橋藤治郎と 胎動期の民芸運動

——美術と産業の間への視線——

濱田 琢司

第1章 はじめに

(1) 「三国荘」から

2005年にロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート美術館で開催された「インターナショナル・アーツ・アンド・クラフツ」展において、そしてまた2008年より日本国内を巡回していた「生活と芸術」展において、アーツ・アンド・クラフツ運動の世界的展開の一つとして日本の民芸運動が取り上げられた (Livingstone & Parry ed., 2005: 朝日新聞社・京都国立近代美術館ほか編, 2008)。そのなかで、話題となったものの一つは、「三国荘」の再現展示であろう。1928年、東京上野で開催された大礼記念国産振興東京博覧会(大礼博)に柳宗悦(1889-1961)ら民芸運動の初期同人たちが出展したパビリオン「民芸館」¹⁾を、アサヒビール創業者の山本為三郎(1893-1966)が会期後に買い取り、大阪の三国に移築したのが三国荘である。企画展では、その三国荘の室内空間の一部が再現され、移築当時実際に使われた、同人による蒐集品や作品もあわせて展示された。

三国荘は、戦争で焼失したとされてきたが(例えば、水尾, 1992, p. 162)、比較的近年になって建築史家の川島智生によって、現存が確認された(川島, 1998)。以降、三国荘への言及が増加したように思われる。先の

再現展示もそうした関心の高まりを示す一例とみることができるだろうか。

この三国荘についてしばしば論じられるのは、一つには、それが民芸運動草創期の運動同人たちによる重要な成果、すなわち運動の「原点」として位置付けうるものであるということである。民芸運動は、大正時代末期に思想家の柳宗悦を中心に創始された工芸をめぐる文化運動で、それまではとくに省みられることのなかった地方の日用雑器に、美術工芸にも負けない「美」があることを唱えたものである。運動の公式なスタートを告げるのは、柳ほか、陶芸家の富本憲吉(1886-1963)、河井寛次郎(1890-1966)、濱田庄司(1894-1978)の4名の署名で1926年に発表された「日本民芸美術館設立趣意書」であるとされることが多いが、1928年の大礼博での「民芸館」は、確かにこの運動草創期の重要な成果の一つであることは間違いない。

またもう一つ、これにからんで論じられるのは、キーマンとしての山本為三郎の存在である。山本は、会期後の「民芸館」の買い取りを打診され、それを受けるわけであるが、これをきっかけとして、大原孫三郎(1880-1943)・総一郎(1909-1968)親子とともに、のちのちまで民芸運動における最も有力な支援者の一人となる。三国荘は、いわば、山本と運動とのこうした関係の始まりを告げるシンボルでもあり、その意味で、山本が第一に取り上げられる人物となるのは当然のことでもある²⁾。

しかし、この三国荘をめぐるには、ほかにも重要な関係者がいた。一人は、大原・山本以前の柳たちの支援者であった高林兵衛(1892-1950)である。浜松の素封家であった高林は、運動の最初のパトロン^{ひょうえ}の一人である。大礼博の「民芸館」に前後して、自宅の改築の際に、旧母屋へ柳らの蒐集品を展示し、「日本民芸館」として公開することを提案したりもしていた。大礼博の「民芸館」についても、資金的な援助は小さくなかったとされているし、建物の基本設計にも大きく関わっていた。しかしその後ほどなく、柳と高林の間に意見の対立が生じたらしく、以後、高林が民芸運動に関わることはなくなってしまった。そのような経緯もあってか、高林は、山本に比べ、言及される機

会がずいぶん少ないようにみえる。

高林兵衛との関係については、先述の川島によって考察も進んでいるが(川島, 2008), 今後さらに検討されねばならないであろう。ただし、ここで注目したいのは、もう一人のキーマンである。それは、40歳にして大礼博の事務総長を務め、柳たちに「民芸館」の展覧を促した張本人、倉橋藤治郎(1887-1946)である。柳自身による「三国荘小史」には次のようにある。

昭和2年のことである。「雑器の美」の出版に付て少なからぬ配慮を受けた工政会の倉橋藤治郎氏から次の相談を受けた。明春東京上野公園で御大礼記念国産振興博覧会が開かれるに就て、吾々に何か出品してはどうかと云ふことであつた。同氏は同会の事務総長であつた。吾々は最初、同人の作品や日本各地の民芸品を選んで幾つかの飾棚に列べるつもりであつたが、もともと什器は建築と伴はずば、その意味の半を失つて了ふ。度々の集まりがあつた後、遂に一棟の住宅を建て、之に器物を納め、それを総合的に出品することが一番本当であると思へた。倉橋氏は吾々の申出を速刻に受けてくれた。そうして、幾万円の予算を組んで吾々に凡てを依頼された。同氏の理解と援助とが無かつたら、此の仕事は着手されずに終つたであらう。又自由に凡ての設計を進めることが出来なかつたであらう³⁾。(柳, 1936, pp.1-2)

さらに、同文では、山本との関係についても触れられている。

会は終わりに近づいた。最初この建物をどう所置^(マツ)するかの議論が上つた。併し幸にも凡ては大阪の山本為三郎氏の好誼に浴することゝなつた。同氏は倉橋氏の知友であつて、進んで此の「民芸館」を購われ、一切を同氏の邸内に移し再設することを快諾せられた。(柳, 1936, p.15; 一部句点を補つた)

こうした記述があることから、倉橋の名前自体は、三国荘の成り立ちを説明する際に、触れられることは少なくない。また柳自身が述べているように、『雑器の美』(柳編, 1927)など「民芸叢書」の出版を手がけていたことも

あったので、これについて言及されることもある。

しかしながら、倉橋が、運動創始以前から、運動の主要同人となる河井寛次郎や濱田庄司と接触があったことや、山本為三郎とどのような関係にあったのかについては、あまり知られていないだろう。実は倉橋もまた、民芸運動の胎動期に、経済的にはないにしても、一定の役割を担った支援者なのである。ただし高林と同様に大礼博ののちには明確な関わりが減少していくことと、戦後すぐに没してしまうこととから、その後、民芸運動の周辺においては、ふり返られることがほとんどなくなってしまった。こうした状況は実は、民芸運動に関してのみならず、彼が活躍したその他の分野においても、同様であるようにみえる。よって、本稿の第一の目的は、三国荘のキーマンの一人として、という点を中心に、倉橋藤治郎というこの興味深い人物を、紹介することにある。

(2) 美術と産業との間への関心

一方、倉橋藤治郎を通して三国荘を考えること、あるいは、倉橋が、大礼博に「民芸館」の出展を促したことを考えることは、単に民芸運動史の一ページを補完するというだけではなく、もう少し大きなテーマにも結びつく事柄でもある。というのも、倉橋は、大正から昭和初期にかけて、美術界と実業界とを横断して活躍した人物でもあったからである。

近年、美術・芸術とその周辺分野との「間」に関わる対象への関心が増加している。周辺からの美術への関心としては、例えば、ジェイムズ・クリフォードによるニューヨーク近代美術館での「20世紀美術におけるプリミティヴィズム」展への批判（クリフォード、2003）⁴⁾などに代表されるように、かつてより美術・芸術との境界をめぐる議論が盛んであった文化人類学では、日本でも『文化人類学』誌上において、「芸術と人類学」が特集され、「従来「芸術」ということばで曖昧に名指されてきたもの辺り」について、この「芸術」辺りに注目することが、人類学にとってどのように面白い景色を見

せてくれるのか」の可能性が議論された（古谷，2008，p. 155）。また同様に美術・芸術との境界領域を含み込みながら，これまであまり積極的な議論がなされてこなかったようにみえる日本民俗学においても，2006年に若手の研究者を中心として「民俗」と「芸術」の節合と相克：1920-30年代」（『日本学報』（大阪大学）25号）という特集が生まれ，「民俗学にまつわる想像力の外延とそれに支えられながら逸脱する実践を，より一般的な生活研究の地平のもとに配置し直すことを目指すための第一歩」として「民俗（土俗）」と「芸術」の節合と相克という問題」が検討された（真鍋，2006，p. 2）。ほか，濱田（2003）や青木（2009）など，「民俗」と美術・芸術との関わりへの論考がみられるようになってきている。

他方，美術の側からの周辺への関心として，ここで注目されるのは，とくに工芸史分野におけるデザインも含めた広義の「産業」との境界へのそれであろうか。1990年代に日本美術史に関するメタヒストリーの研究が進むことで，旧来の「日本美術史」における「美術」のカテゴリーが揺さぶられるとともに，それまでは「美術史」の外側に位置付けられていたような対象への関心が高まってきた。工芸史における産業分野への関心もそのような流れの一環であるように思われる。例えば，明治以降の「デザイン」という対象が，「近代日本の中に浮かび上がり，定着し，変容するそのさま〔中略〕を受け入れる融通無碍な自在さ」（長田，2006a，pp. 5-6）をもっていたものであったとして，旧来の「デザイン」の枠組みを解体しつつ，これを新たに捉え直そうとする試みである長田・樋田・森編（2006）や，メタヒストリーとしての日本美術史研究の蓄積を十分にくみ取りつつ，広範な日本の近代工芸史を描き直そうとした森（2009）などは，そうした流れを代表するものといえようか。また本稿においても少し言及する京都市陶磁器試験場などから産業技術総合研究所中部センターに引き継がれた資料を中心とした企画展「ジャパニーズ・デザインの挑戦」（愛知県陶磁器資料館 学芸部編，2009）のように展示会の形でもこれらへの注目と近年の研究成果が示されている。

本稿もまた、こうした「美術とその周辺」への関心の一端を形成するものである。大正中期に、関西の窯業界で存在感を示した倉橋は、その後、工政会という組織の常任理事となるが、ここで彼は、「国産振興運動」という、国内産業の振興運動に深く携わる。と同時にまた彼は、ある時期には当代を代表する目利き・蒐集家として名をはせており、その意味で、彼自身が、「美術」と「産業」とを横断するような存在の一人であった。

しかも、それらは、ともに趣味的なものに止まるものではなかった。時代性を強く背負ったものでもあったが、国産振興についてであっても、古陶磁・美術についてであっても、彼の関心には、常に「日本」の産業をどうするかという問題があり、彼は、この「日本」という視点から「美術」と「産業」とをとともに重要なものとして思考している。例えば、古美術について言及する時、彼は、国産振興についてと同様に、「日本」の陶磁器や「日本」の手工芸がどうあるべきかと真剣に考えていた。また国産振興を旨とする博覧会であった大礼博に柳たちの出展を促した背景にも、倉橋にとっての「国産」という思想が、単に産業界に関わる一事ではなかったということがあったと思われる。それゆえ、大礼博における「民芸館」の存在を考えることは、一面においては、産業と美術とを横断する倉橋の「国産」の思想を考えることでもあり、それはまた、先述の「間」をめぐる問題を考えることにもつながっていく。これが、倉橋藤治郎と胎動期の民芸運動との関わりを探ることで、本稿において検討したい第二の点である。

とはいえ、本稿ではこれについて本格的な回顧を行うまでの準備をもっていない。ここでは、大日本窯業協会との関わりや工政会での活動に注目しながら、倉橋とその周辺について少し考察を試みたが、これは今後の考察に向けた第一歩程度のものであることをお断りしておきたい。以下ではまず、美術界と実業界・産業界、それぞれにおける倉橋の位置取りを簡単に確認してみよう。

第2章 「美術」と「産業」と倉橋藤治郎

1920（大正9）年の『大日本窯業協会雑誌』第28集第335号に、「芸術としての陶器」（I-19）^{5）}なる文章が掲載されている。柳がバーナード・リーチ（1887-1979）について紹介した「余の知れるリーチ」（柳，1920）を端緒とし、当時の多数派の「美術陶器製造家」を批判し、「純な芸術としての陶器の制作」（p.356）をしている人びととして、富本や河井、濱田らのことを紹介したものである。この文章を書いているのが、実は倉橋藤治郎である。『雑器の美』出版の7年前、大礼博の8年前のことである。しかも、おって詳述するように、この段階ですでに河井や濱田とは直接の関わりをもっていたようである。倉橋が、柳たちに大礼博への出展を促すまでには、思いのほか長い時間的蓄積があったわけである。

ところで一方、倉橋は、この数年前の同誌に、例えば、「耐火材料の品質と其検定の標準」（I-7）や「本邦硝子業と曹達灰問題」（I-14）などといった、産業としての窯業に関わる文章も執筆している。最晩年に書かれた倉橋の主著の一つ『実業教育論』の著者略歴には、「国際経済会議専門員、国際連盟総会随員、国際労働会議使用者代表顧問、世界動力会議日本代表、中央大学及び明治大学講師を経て、現在実業教育振興中央会、東京警察講演会各常務理事、実業教科書及び工業図書株式会社各社長、法政大学講師等」（II-8、奥付け）とある。ここに示されている肩書きなどをみると、上に掲げた文章のうちでは、後者の二本の方が、倉橋の本分であったようにみえる。実際に倉橋は、工業や商業など、いわゆる実業界において、様々な要職を歴任していた。窯業に関する日本最初の全国組織であった大日本窯業協会では、理事を務め、ある時期においては会の運営において大きな役割を果たしていたし、その後常務理事となった工政会では、舵取り役の一人として、戦間・戦中期の日本産業の方向性に多少の影響を与えうる存在でもあったらしい。

しかし先述の「芸術としての陶器」という文章が、倉橋にとってのちょっ

としたお遊びについて述べたものにすぎないかという、決してそうともいえない。第1章でも述べたように、倉橋は、産業界・実業界分野においてのみ知られた人であったわけではなく、「芸術としての陶器」の分野においても、なかなか大きな存在であったのである。例えば、白洲正子（1910-1998）は、青山二郎（1901-1979）の陶器についての鑑識眼の高さを示すための一例として次のように述べている。（青山の）「陶器の鑑識眼について、壺中居の不孤斎、倉橋藤治郎、加藤唐九郎、秦秀雄など、一流の見巧者が、若い時から『天才的な審美眼』の持主と折紙をつけていた」（白洲、1991、p. 11）。壺中居の不孤斎とは、東京日本橋の古美術画廊「壺中居」の創業者・広田不孤斎（1897-1973）のこと、秦秀雄（1898-1980）は、当初、北大路魯山人（1883-1959）とともに星ヶ岡茶寮を営んでもいた料亭主人・骨董商である。ともに、日本の古美術界の牽引者であったといえる。白洲は、そうした「一流の見巧者」の一人として、倉橋を並べているのである。

また白洲が掲げたうちの一人である秦秀雄は、『陶説』に掲載された連載「わが陶師・陶友」において、魯山人、柳、小野賢一郎（燕子）に続いて、倉橋を取り上げている（秦、1962）⁶⁾。そこで倉橋は、陶器の鑑賞について、（魯山人、柳、小野の）「三人と並べて新しい鑑賞にくさびを打ち込んだ四天王のかくれもない一人物であった」とされている（秦、1962、p. 75）。

秦は、戦前にも倉橋について文章を記しており、当時の工芸界における彼のポジションについて語っている。

彼が〔「の」の誤りだろうか：引用者注〕陶磁界、趣味界、或は工芸界に於ける地位勢力（へんな言葉だが）は、やはり何といっても不思議にいつの間にか大将になりきってしまった。御上手をいって立回るでもなく、一つ大将になって、勢力をはって、といふ野心があるでもなく、いつの間にか趣味界の一方の旗頭になってしまった。趣味界の様々の展覧会に彼の名を見ない事はめったに無い程、彼は人気ものでありそしてよく活躍している。（秦、1932、p. 37）

ここにあるように、倉橋は、「趣味界の様々の展覧会に彼の名を見ない事はめったに無い程、彼は人気ものでありそしてよく活躍してい」た存在であり、工政会ほかでの要職とともに、実業界と「芸術としての陶器」の世界との両面において、ともに重要な位置にいたのである。

ところで、実業界や政財界と（古）美術界との二足のわらじを履く人びとという、明治後期から昭和初期における茶の湯復興の主役であった、近代数寄者たちが第一に思い浮かぶだろう。彼らは、日本が急速な近代化＝西洋化へと傾くなかで、政財界人としてそうした流れに身を置いていたがゆえに、いち早く日本的なものの価値に気づき、衰退していた茶の湯の文化を復興していった（熊倉，1997）。その意味では彼らが、近代以降の日本において、政治家や経済人でありながら、美術や芸術の世界にも踏み込んでいったパイオニアたちであったことには違いない。あるいはまた大河内正敏（1878-1952）と彩壺会の人びとをあげることもできよう。理研コンツェルンを率いた大河内は、一方で奥田誠一（1883-1955）らと彩壺会を立ち上げ、陶磁器それ自体に対する純粋な「鑑賞」を提示した。実は、倉橋自身も彩壺会の幹事を務めていたことがあり（秦，1932，p. 37）、また、後述のとおり、大河内とは工政会を通してかなり密な関係にもあった。それゆえ、倉橋も一面においては、大河内と彩壺会に近いポジションにいたということもできる。

しかし秦は、倉橋（や魯山人，柳，小野）は、大河内らともまた違った存在であったとして、次のように述べている。

〔「彩壺」：引用者注〕会の実力者大河内博士は鍋島，柿右衛門，古九谷等色絵にこり、蒐めて研究愛撫する様子であった。茶道の鑑賞，伝統的な愛撫から離れて自由な眼で陶器を眺め初めた当時にしては革新的な運動であった。しかしそれはいかにも幼稚で綺麗な色物以上に出ることはなかった。

しかし茶人の眼からはなれた陶器鑑賞の自由独立の気風は培われた。そこに

勢よく新芽の伸びるようにあらわれた人達があった。そしてやがて自由な鑑賞の目は本稿最初に記した「[魯山人, 柳, 小野, 倉橋]:引用者注」4人によって独自の世界を開拓せしめた。(秦, 1962, p. 75)

さらに、彼らは「支那^(ママ)から朝鮮へと古陶鑑賞が拡がり、安くして面白いものの発見」が「古陶愛好者の気風を金持ちから庶民の鑑賞道楽へと拡大していった」時代における「チャンピオン」たちだったと、秦は言う(秦, 1962, p. 76)。そして、引用部にもあるように、彼らに比せば、彩壺会の取り組みは、「いかにも幼稚で綺麗な色物以上に出ることはなかった」というのである。この秦の言葉を受けるならば、少なくとも同時期に二足のわらじを履いていた人びとのなかにおいて、倉橋は、陶器鑑賞の分野で最も大きな役割を果たした人物の一人ということとなる。秦個人の主観的な判断をそのまま受けるわけには行かないが、少なくとも、このような評価が与えられることがあるような人物だったわけである。

また、大河内や近代の数寄者らにとって、陶器や古美術が、あくまでも道楽としての趣味の領域（もっともここでの「趣味」とは現代的な意味での趣味をはるかに超えるものでもあったであろうが）であったという点も、倉橋と彼らとの違いといえるかもしれない。先の「芸術としての陶器」において倉橋は、柳の「余の知れるリーチ」での主張に同意しつつも、柳との立場の違いを説明しようと、次のように述べている。

茲で誤解のない様に断はつておくのは、私は柳君の批評をよく了解し、之に賛成する者であるにしても、私達は柳君と同一のプラットフォームに立つてはゐない、柳君は芸術としての陶器のみを、或は夫れ計りでないとしても大体夫れに力を入れて見てゐるに對し、私達は窯業全体を通観し、其の一部門としての陶器、其の一部門としての美術品と云ふ風に見てゐるということである。(I-19, p. 333)

「窯業全体を通観し、其の一部門としての陶器、其の一部門としての美術品と云ふ風に見てゐる」とあるように、窯業という産業の世界と「芸術としての陶器」との両方に、(少なくともこの時点においては)真剣なまなざしを向けているのだということが語られている。倉橋にとって、「芸術としての陶器」の世界は、趣味の領域のみにとどまらないものとしてあったのである。一方、ここでは柳との立場の違いが語られているが、この後にスタートする民芸運動の最初期において、倉橋が、実は非常に重要な役割を果たしていたことは以下に詳述するところである。

ところで、ここで、西洋に対しての東洋や日本、あるいは「国産」の重視という側面が、倉橋の思想や関心の基軸でもあったことをもう一度確認しておこう。例えば、先の『実業教育論』で倉橋は次のように述べる。

わが国の実業教育は明治維新の後、欧米から教育制度を輸入し、主として外国人雇教師によって教育を始めたために、教育の根本ともいふべき歴史が、大抵の専門分野に於いては西洋歴史であって、日本歴史に即してゐなかつた。これは永くわが国教育の一大欠点であつた。(II-8, pp. 184-185)

ここでは、近代以降の日本の歴史教育が「西洋歴史」であって、「日本歴史に即してゐな」いことが問題とされている。本書の発行は、1944年のことであるから、「日本」を中心にしようとする内容が記述されることはいわば当然であろう。しかし、倉橋の文章に、西洋ではなく、「日本」や「東洋」への志向がみられるようになるのは、もっと前の1920年前後からのことで、先に触れたの「国産振興運動」も大正後期に創始されていたものであった。むろんこの時期は、「国粋主義」の台頭がみられる時期でもあるので(成田, 2007, p. 117)、倉橋もまた同時代的な流れにのったまでと考えることもできる。しかし一方で少々興味深いのは、倉橋が、河井や濱田といったのちに民芸運動の創始に関わる人々へ関心を向けるのも、あるいは運動全体の支援を行おうとするのにも、その背景の一つには、彼らの取り組みに「東洋」や「日

本」を積極的に捉えていこうとする方向性をみたからであったように思える点であり、また、窯業界全体、産業界全体に対する折にも、同様のスタンスからアプローチしているという点である。この点において倉橋の視線は、民芸運動を含む美術の分野においても、産業の分野においても、あまりゆらぐことはない。よって、倉橋を通して、民芸運動や大正博における「民芸館」、あるいは大正から昭和初期の日本の窯業界、産業界をみることは、そこに「国産振興」や「国産奨励」という動きなかでの、文化や美術と産業との接触を確認することにもつながっていくのではないと思われる。

このように倉橋は、民芸運動の展開においても、陶磁器の鑑賞の分野においても、そしてまた産業（窯業）界・実業界においても、多少の意味をもった存在であった。しかしながら、先述したように、彼とその周辺については、三国荘との関わりに限らず、これまであまりふり返られることはなかったようにみえる。そこで次章以降、上述の点を踏まえつつ、とりあえずの取り組みとして、現時点で把握できている限りにおいての資料や事実から、倉橋藤治郎をめぐるいくつかの事項を検討・紹介してみたいと思う。

第3章 倉橋藤治郎—略歴—

まず、倉橋の経歴について、とくに民芸運動の周辺との関わりに注意しながら、ごくごく簡単にふり返っておこう⁷⁾。倉橋は、1887（明治20）年、滋賀県甲賀郡甲南町（現・甲賀市）に生まれる。少年期の様子などは現時点では不明であるが、その後、大阪高等工業学校（現在の大阪大学工学部の前身）の窯業科に進学し、1910（明治43）年にここを卒業している。のちの窯業・実業との関わりは、このあたりが始まりと言えるだろう。またこの同窓には、京都市陶磁器試験場で河井や濱田の先輩職員であった小森忍（1889-1962）がいたという（笠原、1989）⁸⁾。民芸運動創始以前から、倉橋と河井・濱田との交流があったようであることは既述したが（そしてあって詳述するが）、

そうした交流は、小森を通じて始まったと考えられる。

大阪高等工業学校という技術系の学校を卒業した倉橋であるが、卒業後は、大阪毎日新聞にて記者をしていたという。またその後ほどなく、大阪にあった山為硝子製造所でも仕事をしているが、毎日新聞時代も含めて、その経緯などについては現在の所不明である。山為硝子製造所は、当時の大手窯メーカーであった徳永硝子から事業を引き継ぐ形で、山本為三郎の父・為蔵が1892（明治25）年ころに創業したものであった（山本為三郎翁傳編纂委員会、1970、pp. 12-14）⁹⁾。為三郎は、1909（明治42）年に、17歳の若さでこの経営を継いでいる。それは、当時の大阪、京都、名古屋では、当主は50歳で隠居するのが常であるという慣例に為蔵がならったからであったという（山本、1980、pp. 105-106）。これは倉橋が大阪高等工業学校を卒業する前年のことなので、倉橋が関わるようになったころには、会社はすでに為三郎の時代となっていたことになる。

ではここに倉橋はどのように関わっていたのか。詳細は不明であるが、徳永硝子の徳永善四郎による次のような回想が、『山本為三郎翁傳』にある。

為さんは家業を継いでからも、だいたい外部活動が主だった。仕事の方は番頭に織田、徳田というりっぱな人物がいて、いっさい取り仕切っていた。まかせていたわけだ。技術的な問題については倉橋藤治郎という技師を顧問のようにして大事なときには見てもらっていた。為さんは、こうしておいて外部活動に非常に重点をおいてやっていた。（山本為三郎翁傳編纂委員会、1970、pp. 96-97）

「技術的な問題」を解決する「技師」であったようにあるので、高等工業の窯業科を卒業した技術者としての仕事を受けていたということであろうか。また、1917（大正6）年、アメリカに視察に出た山本に対して、農商務省の海外留学生として同時期にアメリカに滞在していた倉橋が、色々と世話を焼

いたという話もある（笠原，1989，p. 7）。先に，倉橋と山本とに深い関わりがあったと記したが，その関わりは，このような形で，おそらくは明治時代に始まり，深まっていったものだったのである。

民芸運動の同人たちと山本との出会いの始まりについては，東京高等工業学校窯業科で学んだ濱田が，その在学中に課外実習先として山為硝子を訪問し，そこで山本と顔をあわせていたというエピソードが紹介されることもある。しかしもちろんそれは，「ただ出会っただけ」という域を超えるものではなかった。そののちの支援に直接に関わるような出会いはやはり倉橋の仲介によるところが大きい。『山本為三郎翁傳』には次のようにある。

〔「山本為三郎と」：引用者注〕濱田氏は，東京高等^(マア)工芸の学生時代からの結びつきである。同校は卒業期の学生をガラス工場の実地見学に向けることになっていて，その見学工場に山為硝子が指定されていた。濱田氏はこのとき，山為硝子の若社長に会っている。大正初期のことであり，濱田氏が20歳，山本翁が21歳のときだ。もちろん，このときは両者は見学学生と経営者の関係にすぎないが，これが縁となり，倉橋藤治郎氏が両者を結びつけて，以来山本翁と濱田氏の親交が延々50余年つづいたわけだ。民芸運動に山本翁が終生深く，大きく，肩入れした一つの動機は，やはり濱田・河井両氏との人間的結びつきからとみるべきである¹⁰⁾。（山本為三郎翁傳編纂委員会，1970，p. 296）

「濱田・河井両氏との人間的結びつき」が，山本を民芸運動に肩入れさせた動機の一つであると結ばれているが，文中では，この「結びつき」をもたらし存在として，倉橋があがっている。そして続けて，「大正初期，^(マア)「御大礼記念博覧会」なる催しが大がかりに行われた。倉橋藤治郎氏の入れ知恵で，山本翁はこの博覧会を機に民芸運動同人の宿願を実現すべく奮闘する」（山本為三郎翁傳編纂委員会，1970，p. 297）とある。第1章で引用した柳の文章にもあったように，大礼博の「民芸館」の購入を山本に打診し，山本と柳らと引き合わせたのは，実は倉橋なのであり，倉橋がなければ，山本が三国

荘のキーマンとなることもなかったかもしれないわけである。

ところで、大阪高等工業窯業科からのつながりなのであろうと思われるが（あるいは、山為硝子製造所での仕事の関係からであろうか）、倉橋は、大正期から大日本窯業協会の機関誌『大日本窯業協会雑誌』上に頻繁に登場するようになる。管見の限り、倉橋の名前が、同誌上に最初に見られるのは、1912（大正元）年の第20集第240号の「会員転居欄」である。よって、少なくともこれよりも早く、窯業協会員になっていたことになる。転居先は、「愛知県知多郡西浦町西阿野 建築陶器合名会社」となっているが、これについての詳細は、現時点では不明である。その後、1917（大正6）年には、東京への転居が示されているが、この転居やアメリカ留学などを挟みつつ、第1表にもあるように、1915（大正4）年ころから、誌上に多くの文章を寄せている。また、1920（大正9）年の第29集第338号に寄せた、「改造途上の窯業協会」（I-20）からは、協会の組織改造においても、一定の役割を担ったらしきことが伺え、協会執行部の一人にまでなっていたようである。またこの時期には、工政会の関西支部において何らかの仕事を受けもってみたいらしい。そして、窯業協会の改変や工政会関西支部での活動が目目されたゆえになのだらう、1923（大正12）年には、工政会の常務理事として引き抜かれ、これを務めることになる。倉橋を、このポストに推挙したのは、工政会の新理事長となった大河内正敏であった。工政会時代の倉橋については後述するが、この後ほどなく起こった関東大震災の復興対策などに力を発揮し、それが、大礼博での事務総長という大役を任されることにつながっていったという（笠原、1989, pp. 8-9）。

他方、工政会での倉橋のもう一つの大きな事業は、工政会出版部の組織化であった。工政会の出版部がスタートするのは、1924（大正13）年のこと。当時は、あまり流通することのなかった官庁出版物やパンフレット類、政府研究機関などによる調査報告などの出版・流通を意図して立ち上げられたという（水谷、1947, pp. 50-53）。比較的初期の段階で手がけられたのは、商

第1表 『大日本窯業協会雑誌』掲載の倉橋著文献一覧（管見の限り）

	論文名	年号	巻号	頁数
1	陶磁樓小言	1912/T1-12	第21集第244号	167-170
2	大阪附近の煉瓦業	1913/T2-2	第21集第246号	260-269
3	窯業界管見	1913/T2-3	第21集第247号	335-340
4	マグネシア煉瓦に就いて	1913/T2-5	第21集第249号	411-424
5	笠間陶業	1913/T2-7	第21集第251号	519-525
6	Rotary Kiln Lining に就いて	1913/T2-10	第22集第254号	67-73
7	耐火材料の品質と其検定の標準	1914/T3-3	第22集第259号	313-341
8	経済的見地よりせる常滑土管業観（上）	1914/T3-4	第22集第260号	367-381
9	経済的見地よりせる常滑土管業観（下）	1914/T3-5	第22集第261号	405-420
10	信楽陶業調査資料（上）	1914/T3-11	第23集第267号	81-93
11	信楽陶業調査資料（中）	1914/T3-12	第23集第268号	133-154
12	信楽陶業調査資料（上の二）	1915/T4-2	第23集第270号	235-250
13	信楽陶業調査資料（下）	1915/T4-4	第23集第272号	373-393
14	本邦硝子業と曹達灰問題	1915/T4-10	第24集第278号	41-46
15	製瓦界改良の傾向	1916/T5-5	第24集第285号	403-415
16	陶磁器焼成用登り窯に就いて	1916/T5-12	第25集第292号	123-139
17	米国通信	1918/T7-7	第26集第311号	339-341
18	米国通信	1918/T7-8	第26集第312号	368-370
19	芸術としての陶器	1920/T9-7	第28集第335号	333-336
20	改造途上の窯業協会	1920/T9-10	第29集第338号	37-43
21	京都陶■の立脚点を論じて将来に及ぶ	1921/T10-2	第29集第342号	181-186
22	窯業品規格制定の急務	1921/T10-3	第29集第343号	223-225
23	窯業教育に就て	1921/T10-5	第29集第345号	299-301
24	窯業界の合同問題	1921/T10-6	第29集第346号	339-340
25	本邦窯業上に於る米国の影響	1921/T10-7	第29集第347号	383-389
26	窯業界偶感	1921/T10-8	第29集第348号	424-427
27	原料政策を確立せよ	1921/T10-9	第29集第349号	469-473
28	関西を旅行して	1921/T10-9	第29集第349号	490-491
29	再び改造途上の窯業協会に就て	1921/T10-12	第29集第352号	621-623
30	米国窯業界の現状と本会員に対する希望	1922/T11-7	第30集第359号	未見
31	陶界近状	1922/T11-8	第30集第360号	357-370
32	窯業に関する教育、試験機関の改発に就て	1922/T11-12	第30集第364号	581-586
33	窯業界の近況	1923/T12-1	第31集第365号	1-6
34	関東大震災と窯業	1923/T12-12	第31集第373号	393-396
35	寧ろ使用者を教育する必要	1924/T13-9	第32集第381号	381-382

注) 文献17は「在米 倉橋生」、文献18は「在紐育 倉橋生」の著者名での執筆。
文献21の■は落丁。「業」が入る。

工省の調査報告書であった『工業調査彙報』や東京工業試験場、大阪工業試験場、陶磁器試験場などの試験報告などであった。また工政会の機関誌『工政』はもちろんのこと、商工省工芸指導所の『工芸ニュース』などもここから発行された。出版部は、発足の翌年には、倉橋個人の責任のもとで運営されるようになっていたらしく、工政会における倉橋の位置の大きさを知ることができる。そしてその後は、出版人としての業務が倉橋の最も公的な仕事となっていく。

こうした体制のもと、同出版部は、工業系の書籍を中心に個人による著作の出版も手がけるようになっていく。昭和になると他分野の書籍も発行するようになり、その第一のものが、民芸関連の書物であった。柳宗悦編『雑器の美』（1927）、柳宗悦『初期大津絵』（1929）、浅川巧『朝鮮の膳』（1929）、上村六郎『丹波布の研究』（1931）の『民芸叢書』をはじめ、石丸重治編『英国の工芸』（1930）、浅川巧『朝鮮陶磁名考』（1931）、濱田の初の陶器集となる青山二郎編『濱田庄司陶器集』（1933）などが、この出版部から発行されている。倉橋の個人的な意向が強かったであろうこれらの出版は、草創期の民芸運動の啓蒙活動に大きな役割を果たしたことだろう。一方、いずれも凝った体裁であったために、それらは「ソロバンでは依然として経費をまかなうまでにはゆか」ない、「いわばお道楽出版」であり（水谷，1947，p. 62）、「かけ出しの編集長」として倉橋の下についていた水谷三郎を大いに悩ませたものであったという（水谷，1947，p. 114）。とはいえ、それらは、その後、倉橋の編により出版された『陶器図録』などを含め、「工芸趣味の普及」とともに、第2章に示したような「倉橋さんのセトモノにおける地位を確立」させたものであった（水谷，1947，p. 62）。実際に、秦も「近来の陶書出版は殆ど氏〔倉橋のこと：引用者注〕のひきいる工政会に壟断されたかの観がある。〔中略〕次から次へと好著があらわれて、焼物を買ひ本を買ひしてゐてはたまらない思ひをさせる」（秦，1932，pp. 38-39）と述べている。

その後、1934年に工政会を退いた倉橋は、翌35年1月に(株)工業図書を立ち上げ、より積極的に出版事業に関わることになる。同時期には実業界と教育界との連携を強めることを目的とした組織である(財)実業教育振興会の常任理事ともなっている。こうした立場との関係もあり、工業図書では、工業関係の教科書、専門学術書・技術書などを積極的に出版していった。

戦局が悪化する1943年、出版会も産業統制の対象となり、出版社の強制的な統合や廃止が指示された。そのなかで、1944年、工業図書のほか、明文堂、西ヶ原刊行会、経済図書などの13社が集まって、現在にも続く(株)産業図書が発足した。初代の社長は、明文堂の周防時雄が務めたが、一年足らずで倉橋に交代した(笠原、1989、pp.12-13)。終戦直後には、英会話本の需用があることを見越した倉橋の発案で、戦前の英会話本を復刻、出版し、大きな売り上げを得たという。ところが、倉橋は、敗戦により混乱した会社の運営にあたるなかで体調を崩し、1946年4月5日に急逝してしまう。現在、古美術の世界や民芸運動の周辺において、倉橋の存在が忘れられがちであるのには、戦後すぐの、こうした早すぎる死が一つの要因としてあると思われる。

以下では、民芸運動、国産振興運動、美術と産業との間といった事項を意識しながら、大日本窯業界および工政会時代の倉橋とその周辺について検討してみよう。

第4章 『大日本窯業協会雑誌』と倉橋藤治郎

(1) 大日本窯業協会の「改造」と倉橋藤治郎

上述のとおり、工政会において、あるいはその後の出版界において、組織を束ね、運営することに関してしばしば能力を発揮した倉橋であったが、工政会以前に、そうした才能を発揮した場所の一つが、大日本窯業協会という組織であった。大日本窯業協会とは、1891(明治24)年に東京工業学校陶

器瑠璃工科（のちの東京高等工業学校窯業科，現東京工業大学）の卒業生らが結成した「窯工会」という組織を前身とし，翌年に「大日本窯業協会」と改称，再編されて誕生した日本で最初の窯業関係の全国組織であった（山田，2003）。

会の発足と同時にその機関誌として創刊されたのが『大日本窯業協会雑誌』であり，これは，英文雑誌“Journal of Ceramic Society of Japan”として，現在にも引き継がれている。現在では，完全に化学・工学系の雑誌となっているが，大正期以前には，化学・工学系の論文・内容を中心としつつ，それには収まらない幅広い内容が含まれていた。倉橋もまた，ここにそのような文章を寄せていた一人であった。

第1表は，『大日本窯業協会雑誌』に掲載された，管見の限りでの倉橋の文章の一覧である。先にも少し触れたように，倉橋は，1917～18（大正6～7）年に農商務省の海外留学生としてアメリカに滞在していたが（「米国通信」とあるI-17, I-18は，その折のレポートのようなものである），この前後から，批評的な文章が多くなり，のちの民芸運動同人らとの結びつきもみられるようになってくる。

第1表にそってしてみると，自らを「陶磁樓」としたI-1では，瀬戸や信楽の現状を批判的に断じており，すでに批評的スタイルをみせているものの，その後，米留学前の最後の文章と思われる1916（大正5）年の「陶磁器焼成用登り窯について」（I-16）までは，一部を除き，笠間や信楽，常滑などの産地調査報告（いずれもそれなりに詳細である）や「産業」側の専門家としてのいくつかの状況報告が続いている。それが，とくに1920年代に入ると，「京都陶■の立脚点を論じて将来に及ぶ」（I-21；■は落丁，「業」が入る），「陶界の近状」（I-31），「窯業界の近況」（I-33）といったような，斯業界を展望するような内容を，掲載するようになっていく。そのような批評的な文章が（時に，年ごとの総括のような形で）掲載されるようになる背景には，1920（大正9）年に行われた窯業協会の改組において，倉橋が，中

心的な役割を担い、その後、会の運営（とくに編集）にもあたっていたらしいことがあると推測できる。

もっとも、倉橋が、会の組織運営に問題を提起するのは、アメリカ留学以前のこと。1913（大正2）年の「窯業界管見」（I-3）では、「関西支部設置の提議」として、「実際は北越（金沢）尾農（名古屋）九州（有田）関西（京阪大阪）位に地方通信委員と云ふような有耶無耶なものより今少し具体的な支部と云ふような（尤も名はどうでもよい）ものを設ける必要がある筈である」（I-3, p. 337）と提言している。数年後、これを実現すべく動いた結果が、1920（大正9）年に行われた窯業協会の改組ということだろうか。

その改組について触れた「改造途上の窯業協会」のなかで倉橋は、再度、地方支部の設置の提言を行っており（I-20, p. 39）、その思いの強さを知ることができる。ここではほかに、「窯業協会の第一の事業」（I-20, p. 37）とされる機関誌の改良、および毎年開催されていた「講談会」の改変、協会の社会教育機関としての役割、会勢の拡張、などが提言されており、「吾々は〔中略〕本邦工業界に於る化学工業の地位、化学工業界に於る窯業の占むる重大な地位を認識します時、従来の大日本窯業協会が余りに無為であった事を遺憾とする者であり、熱心なる会員諸君と共に吾々は協会改造の途上へと進まんとして居る者であります」（I-20, p. 61）と結ばれている。

倉橋当人の文章であるので、実際に彼がどの程度この改組に関与したのかは判断できない部分もあるが、同会は翌年初には、「尾農、京都、大阪に支部を設置する事」（I-21, p. 181）になっており、倉橋自身は、この後、工政会の常任理事となるまでの数年の間、自ら「窯業協会の第一の事業」とした、『大日本窯業協会雑誌』の編集にあたるという形で自身の提言を実現させている。

他方、ここで、その内容について詳述するゆとりはないが、倉橋が編集に直接関わったであろう、1920年前後からの数年間には、河井や濱田、小森らによる文章をはじめ、同誌の方向性としては少し特殊かと思えるような文

章が掲載されている¹¹⁾。また第1表の後半にあたるこの時期には、倉橋自身の文章からも、のちの民芸同人たちへの言及をみることができる。

(2) 新しい動きへの注目—倉橋とのちの民芸同人たち—

では、倉橋は、彼ら—とくに、河井と濱田—に、どのような点から関心を示したのか。本節では、この点を中心に、アメリカ留学以後の倉橋による批評的文章を、いくつかみてみることにする。

まずは第2章でも触れた「芸術としての陶器」(I-19)である。これが、柳の「余の知るリーチ」を端緒した文章であることはすでに述べた。倉橋は、ここで「只技巧のみに没して美を知らない現代の陶工に如何なる芸術家であろう」という柳の言葉を冒頭に掲げ、「此に殆ど無条件に賛成する者は決して私一人ではあるまい」(I-19, p. 333)という。「所謂美術陶器界の名工、大家、巨匠と云った人」については、その技巧は確かであって、「善意を以て眺めている」とした上で、その芸術性について、次のように批判的に述べている。

彼等の製品が俗に美術品と称せられる事から彼等の作品が芸術的産物であり彼等が芸術家であると云ふ者があれば夫れは明に間違ひである、値段の高い花瓶、香盒などを作る事が芸術としての陶器を作る所以ではない、[中略] 伝統が彼等をバックしている、技巧が彼等を有名にしている、彼等の芸術、彼等の人格、彼等の生命は第二次第三次の考慮の問題であり、多くは措いて之を問わない、彼等の若い者の中には此の状態が苦しくて仕方がない、何とかして此の伝統と名声との束縛と脅迫から脱れ出そうと努力せる者が一人ならず認められる、然し心持ちがイラ、ゝすればする程彼等の腕はイヂけて行く計りである、所謂美術的陶器の製造元からは斯くして中々芸術家は生まれ難い。(I-19, p. 334)

件のリーチや富本が、「アマチュアリズムを積極的によしとする個人主義

であり、画家・彫刻家と同じような意味での個人作家としての工芸家のあり方」（土田，2005，p. 224）を提示し、工芸の「芸術化」の傾向がみられ始まったのが1910年代の前半のことであった。倉橋は、「所謂美術陶器界の名工、大家、巨匠と云った人」からは、そのような新しい動きは生まれないと指摘しているわけである。

そして倉橋は、リーチのほかにも、「芸術としての陶器」をなす人物として、4人の名前をあげている。一人目に掲げられているのは富本であるが、富本については、「直接殆ど知る処がない」といって、ごくごく簡単な記述にとどまっている。二人目として、もっとも字数を割いて紹介されるのは、濱田である。濱田について、倉橋は次のように述べる。

私達は又濱田庄司君をもっている、[中略] 同君は最近の船でバーナード、リーチ君と共に英国へ渡ってセント、アイヴス海岸の芸術家村で陶器の製作に従うそうである、日本の陶器界は支那^(ママ)、朝鮮から其の製作を教えられて以来著しい発達を遂げた、更に維新後幾多の実用的陶磁器の製作に就て欧米に学ぶ所があった、陶磁器関係の人で欧米の視察、研究、留学に趣いた者は数十人に上がっている、彼等は欧米の智識、學術、技術を貪欲に吸収して帰朝した、又独逸は曾てワグネル教授を我れに送った、英国は此十余年間リーチ君を私達の仲間として生活させた、夫れに拘わらず日本の陶業界が欧米に与えたものは彼等の購入した数千点の古陶器の外殆んど何物もなかった。

彼等欧米人が日本へ出て来れば吾々だって教えてやる、来ないのが悪いと云う人もあるだろう。ワグネル教授は雇って来たので彼れ自身の特志で来たのではないと云う人もあるだろう、然し此んな事は枝葉の問題で、其の手段方法は兎に角我れは多くを獲て殆ど与えないのは事実である、日本の此五十年の歴史は殆んど此の種の事実の反證の集積である、国际上孤立せんとする懸念のあるのも一には此んな根性の然らしめる所であるが、余談は兎もあれリーチ君を送ってくれた英国に向かって濱田君を送り得る事は文化の為に芸術の為に私達の非常に愉快とする所である。(I-19, pp. 334-335)

ここでは、これまで外国から吸収するばかりであった日本の陶磁器分野に

あって、海外たるイギリスへ向かう濱田の存在が、「文化の為に芸術の為に私達の非常に愉快とする所である」とされている。濱田は、東京高等工業学校窯業科を卒業し、京都市陶磁器試験場に勤務していたところに、リーチに出会い、「アマチュア」であったリーチの仕事を、窯業の専門知識をもってサポートしていた。また、リーチとともに渡英した理由も、欧州の技術を学ぶというよりも、東洋や日本を客観的に捉えるためという面が大きかったという（濱田、2005、pp. 14-19 参照）。倉橋は、濱田のこうしたスタンスに注目したのかもしれない。

ところで、この文章が書かれた1920（大正9）年は、文中にも触れられているように濱田がリーチとともにイギリスに渡った年である。これは濱田にとって、ロンドンで初の個展を開催し、陶芸家としてデビューする3年前、帰国後の日本でのデビューの5年前、ついでに加えるならば、民芸運動の公式の創始の6年前となる。直接の交流がなければ、その作品・作風を知ることにはできない時期であるので、少なくともこの段階で、倉橋は濱田と何らかの交流をもっていたと考えることができる。

次に倉橋は、「所謂美術陶器の窯元として所謂名工、大家になる事も出来又芸術家として起る事も出来そうな人に京都の河井寛次郎君がある」（I-19、p. 335）と河井を紹介する。さらに続けて、「所謂美術陶器界の頭目となり指揮者となって彼等〔河井と濱田のこと：引用者注〕を善導する事も非常に必要な事である、現在の日本に此れに必適した人は満鉄窯業部の小森忍君であろう」（I-19、p. 336）と小森の名前を最後にあげている。

これらは、すべて京都の陶磁器試験場にゆかりの面々である¹²⁾。のちに民芸運動に関わる人々に対する倉橋の関心は、この京都市陶磁器試験場の周囲から始まっているのである。河井の紹介に際し、倉橋は「同君〔河井のこと：引用者注〕も蔵前窯業科の出身で濱田君の先輩であり、共に又京都の陶磁器試験所に育った、京都の陶磁器試験所は藤江時代から植田時代に移って明らかに内容が一変した、そして河井君や濱田君を出した」（I-19、p.

335) と、彼等が陶磁器試験場から巣立ったということを明示している。

「藤江」とは、陶磁器試験場初代場長（所長）の藤江永孝（1865-1915）のことである。京都市陶磁器試験場は、1896（明治29）年に設置され、ちょうど濱田が在籍していた時期に国立へと移管され、窯業に関する国立の試験機関となる。ここで藤江は、日本の窯業の欧化を推進し、様々な西洋的窯業技術の導入を進めたが、1915（大正4）年に急死してしまう。その後を継いだのが、文中にある「植田」こと植田豊橋（1860-1948）であるが、植田は、急進的な欧化主義を唱えた藤江に比し、かなりリベラルであったとされ、また大正中期からの時代状況もあり、日本的なものを重視しようという志向ももっていた¹³⁾。植田時代には場員も比較的自由に製作などにあたれたようで、上述の三人、とくに河井と濱田の登場は、そうした雰囲気があってゆえの部分は少なくない。倉橋が指摘するのは、試験場のこうした状況の変化であった。

倉橋がこれらの面々に注目し始めたのは、いつ頃のことだったのだろうか。倉橋が、『大日本窯業協会雑誌』に文章を書くようになってほどなくのころ、「不二生」という筆名で「一筆啓上仕候」という連載記事が掲載されていた。「不二生」が倉橋なのかどうかは現時点では不明であるが、いかにも倉橋が書きそうな内容が、倉橋が書きそうな文体によって綴られているので、興味を惹くものでもある。この連載の第6回に、「京都にて」と題して次のような記述がある。

却説京都陶磁器は目下矢張沈滞に御座候。〔中略〕元來京都は陶磁器用主要原料の何者をも産するに非ず、而も尚よく本邦陶業界に樹つ所以は一に其秀拔なる技術テクニクに基かずんば非ず候、製造技術意匠イテウ図案等の各方面に最高級にへと進む所に京都陶業の存在の根拠有之に候。現在も然らずとは云わず然し今少し足元を確かにし度きものに御座候。仮に美術陶器にても何山などと名でおどかす古い手は止めて実力を以て且インターナショナルに京都たる所以のものを發揮し度く、純日本趣味のものと共に日本に生まれた世界趣味のもの（西洋擬ひ

のものでない)に移り度、此点より小生は近来陶磁器試験場のスチュディヲより出る作品を面白く観じおり候。(不二生, 1914, p. 70)

注目すべきは、もちろん、後半の部分である。京都の陶界は、「名でおどかず古い手」ではなく、「インターナショナルに京都たる所以」を示し、「純日本趣味のものと共に日本に生まれた世界趣味のもの」に移行する必要があること訴えたものであるが、当時、この点から「面白く」思えるものとして、「陶磁器試験場のスチュディヲより出る作品」があげられているのである。掲載されたのは、藤江が死去する前年の1914(大正3)年のこと。ちょうど河井が入所したころのことである。場長が変わって、雰囲気が一変したとの先の倉橋の記述とは若干矛盾するものの、この頃から試験場での制作が注目されていたことが分かる。先に述べたように、この文章は倉橋のものである可能性を感じさせるもの実際は不明である。しかし、彼が少なからず関与した『大日本窯業協会雑誌』という場において試験場に対するこのような評価がみられたことは興味深い。「不二生」が倉橋ではないとしても、同時期に倉橋も、この「スチュディヲ」に関心をもち始めていたのではないだろうか。

倉橋自身はその後、再度、彼等への関心を示している。1922(大正11)年の窯業協会総会における講演原稿として会誌に掲載された「陶界近況」(I-31)である。「さて此数年來の陶磁器界の全体の色はどうであるかと申しますと、東洋に帰りつゝあると云ふ事であります、一旦深く然し又無理解に陥ってゐた西洋風の模倣から思ひ直して東洋に立返つてゐる事であります」(I-31, p. 357)と始まる本文は、当時の陶業界において西洋志向から東洋あるいは日本への志向が強まってきている状況を述べたものとなっている。かつて藤江の指導のもとに「西洋のものを無条件に近く受け入れてゐた」京都が、東洋/日本への転向の中心となっていることが指摘され、「斯様な傾向が或る久しい間続くと自然形勢が変化して来て、今度は工芸美術品、東洋風陶器の方面が台頭する時期が来るようになるのは然るべき傾向であります」

(I-31, p. 361) として、次のようにその状況が語られる。

斯様に工芸美術品としての陶器を製作する風が盛んになるに就て、京都にも自然二つの流れが認められました、一方は京都在来の陶業家中の名工大家の群れ即ち例えば錦光山宗兵衛、諏訪蘇山、伊藤陶山、宮永東山、河村蜻山、清水六兵衛、清風與平、高橋清山其他の人達であります、此の人達の大部分は中澤岩太博士の下に遊陶園と云ふ作家の団体を作って、一時美術陶器界の中心でありました、やがて又此れ等の人達を後継せんとする若い人達が、矢張り中澤岩太博士の参加に集まって時習園を組織しました、要するに京都土着の作家、五條、粟田の町の作家達であります。

他の一方は専門学校を出て京都市立陶磁器試験場へはいった青年達、即ち小森忍、河井寛次郎、濱田象二の三君であります[「象二」は濱田の本名:引用者注]、詰り従来陶器と何の関係もない社会から東京又は大阪の高等工業の窯業科へは行って、初めて陶器とはどんなものか、轆轤とはどんなものであるかを中年にして知った人達であります、所が五條、粟田の作家達が中頃余程西洋化し、ハイカラなものも作り、或は旺んに、日本、支那^(マア)、朝鮮の古い写しものに傾倒していた間に、試験場から出た此の3人の青年達は、まっしぐらに東洋大陸の古代、唐、宗、元、高麗に突っ込んで行きました、此れは面白い現象であります。

五條、粟田の大家名工達に就ては最早定評がありまして、私が冗言を加える余地がありません、然し此の試験場出の三人の青年作家達に就ては少し申上げ度い事があります、丁度彼は10年前でありました、小森忍君が試験場生活を始めたのは、それから3、4年の月日が経ちまして同君は技術者の立場から東洋古陶器の真面目な研究試験に着手しました、最初取り掛ったのは青磁釉であったと思ひます、其の頃河井寛次郎君がはいって来ました、もう此の時分には藤江氏が逝くなられて現在の植田豊橋博士となり、空気も大分りべラルになってゐました、従つて所員は試験、調査等の事務と共に陶器の製作を楽しむ風が出来かゝつてゐた所へ、一、二年遅れて濱田象二君がはいって来ました、一時は試験場は寧ろ国立磁器製造所になるのではないかと、欧州でも主な国々には帝室又は王室の磁器製造所や国立製造所がある、ドイツのベルリン、フランスのセーブル、デンマークのコペンハーゲン、旧オーストラリア帝国のウイン等が其の例であります、丁度此京都の試験場も政府の直轄になりそうな勢ひ

でゐたので、此う云ふ予想もされたのであります。その内に河井君は五条坂で独立して鐘溪窯を開き、小森君は満州大連に行って満州中央試験所産業課の研究主任として、日頃好きな支那古陶磁器の研究試作に没頭する事となり、濱田君が最後迄残つてゐましたが、此れも2、3年前パーナード・リーチ君と共に英国に渡りました。此うして此の五条坂の陶磁界に於る梁山泊は解散されましたが、其の時分からよく此の三人の作家達を知つてゐる私は、爾来就中此の1、2年此れ等三君が一生懸命に陶器の製作三昧に入つてゐるのを見て愉快に堪えないものであります。(I-31, pp. 361-362)

長い引用になつたが、ここには、一つには小森、河井、濱田の位置付けについての、そしてもう一つには、倉橋の思想のあり方と河井らとの関わりについての、それぞれ重要な内容が含まれている。

倉橋によれば、当時の京都の陶業界において、西洋からの転換としてみられた動きのうちの一つを、小森、河井、濱田の三人が代表してゐたという。五条、栗田の作家たちとは異なり、彼らは「まっしぐらに東洋大陸の古代、唐、宗、元、高麗に突っ込んで」いったとある。これら、彼らがターゲットとした諸窯は、当時、新たに注目され価値付けられていったものであったという¹⁴⁾。すると、「五条坂の陶磁界に於る梁山泊」と評されている彼らは、当時の新しい評価・成果をめざとく受容したわけであり、その意味で、時代をリードする面をすでにもつていたといえるのかもしれない。

一方、引用後半部では、そんな彼らと倉橋との関わりを多少知ることが出来る。その交渉の経緯を文章の流れから推測すると、やはりそれは小森との関係から、試験場の存在、実践に興味をもち、小森の後輩らとも交流をもつようになったと理解するのが自然であろう。藤江場長は大阪高等工業学校の講師も務めていたようなので(松下, 1991, p. 15)¹⁵⁾、藤江の存在が媒介となつた可能性も、あるいはある。いずれにしても、その後、河井、濱田と入所順に接触をもち、「よく此の三人の作家達を知つてゐる」ようになったと思われる。のちに、出版そして、大礼博を通して民芸運動を支援していくことの

始まりは、このあたりの接触にあったことがおよそ確認できるわけである。

さて、いくつかの文章について、長々と引用しつつ確認してきたが、倉橋が、河井や濱田に注目した理由は、おおよそ、次の二点となるだろうか。すなわち、一つは、「東洋に帰つゝある」(I-31, p. 357)と倉橋が判断する当時の陶業界において、その流れのなかでもより新しい動きを担っていたのが河井や濱田、小森だったという倉橋の認識である。ここには、彼が、国産振興運動を展開していくなかで、さらに強調するようになる「日本」というものへの関心の萌芽（それは、国粋主義的思想の萌芽なのかもしれないが）をみることができる。そして、倉橋にとって、その関心から興味を惹かれる存在として濱田らがあったということになる。

またもう一つは、美術と産業との間からの動きへの注目であろうか。京都市陶磁器試験場は、先にみたように（藤江が場長の時代はとくに）窯業の西洋化・近代化を目指す産業研究機関であった。こうした場所にあって、主流の産業研究部門ではなく、河井らに注目するあたりが、倉橋の独自の視点といえるが、それは、倉橋が美術畑の人間で、それゆえに産業機関における美術的部分に注目したというわけでは、必ずしもない。「改造途上の窯業境界」(I-20)において、「本邦工業界に於る化学工業の地位、化学工業界に於る窯業の占むる重大な地位」を鑑みて、当時の窯業協会の状況を憂いているように、少なくとも当時の窯業協会を代表しての倉橋の基本的な方向性は、いわゆる産業に軸足を置いたものであった。産業界に軸足を置きつつも、小森、河井、濱田という、産業の専門機関における「美術」的存在に注目する視点が、倉橋のまなざしの、もう一つの特色であるといえるのだろう。

おそらくは、「日本」および「美術と産業との間」に注目する視点が、河井、濱田らのその後の動きと連帯しつつ、のちの民芸運動の支援へと結びついていったのであろう。以下では、工政会と大礼博に目を転じ、倉橋のこうしたまなざしも含めてみてみよう。

第5章 工政会への展開

工政会とは、日本の工業・産業振興を推進することを基本的な目的とした組織であった。その綱領には、「本会は邦家発展の基礎は工業にありとの信条の下に団結し、工業の独立を確保せんが為、工業家の連絡を完ふし、工業に関する組織及び行政の刷新を遂行し、工業教育の振興に努め、又国家的緊急問題を討議して国民を指導し、当局を誘掖するの任に当らんとす」(工政会, 1933 ころ, p. 2) とある。会が発足したのは、1918 (大正 7) 年 4 月のこと。倉橋はその創立に参加しているらしいが (斎藤, 1987, p. 87), 初期の活動は今のところ把握できていない。また、工政会自体、初期にはそれほど活動的ではなかったという。それが変わるのは、1923 (大正 12) 年 4 月に大河内正敏が理事長についてから、とくにその半年後に起こった関東大震災後の帝都復興計画に関与して以降のことであるという (赤坂, 1926, p. 13; 斎藤, 1987, p. 87)。

倉橋は、その大河内にスカウトされ、大震災直前に工政会の常任理事となる。震災直後の工政会は、帝都復興院のブレーンの一つとしての大役を担っていたようで、倉橋は、常任理事に就任してすぐにこの仕事の指揮をとることになる (笠原, 1989, p. 8)。そして常任理事を退く 1934 年までの間、ここに「精魂を傾け」、それによって倉橋の存在は、「工業界に認められ」るようになったという (水谷, 1947, p. 6)。

倉橋が書いた「工政会の発展とその将来」(倉橋, 1924)¹⁶⁾ によりつつ、工政会の業務について触れた斎藤憲によれば、工政会の仕事には、①「産業立国策の確立」②「工業専門家の職業紹介」③「全国工業家の啓発覚醒」④「工業関係各団体間の連絡提携・情報の総合」があり、「工業政策推進のための組織という性格」と、例えば②の業務に代表されるように「『工業家』[中略]のトレード・ユニオンの性格とが混在していた」組織であったらしい(斎藤, 1987, pp. 111-112)。工政会における倉橋の大きな仕事の一つに、出版

会の設立があったことはすでに述べたが、出版への取り組みも、会のこうした事業に関連していた。

倉橋が出版事業に手をつけるのは、工政会常任理事となってほどなくのこと。「それまで門外不出だった官庁出版物の普及を目的とし」（水谷，1947，p. 50）で立ち上げられたもので、工業関連の各種専門情報を多くの人・機関に容易に手に入るようにすることを目指していた。その後，1925（大正14）年1月には，工政会出版部を組織し，工政会本体とは別の組織として，倉橋がその責任を担うようになる。こうした取り組みは，先の四つの業務にそっていえば，直接的には，④および②に関わるものであったといえるだろう。出版は，農商務省の機関誌であった『工業調査彙報』ほか農商務省関係の研究機関の研究報告書類などに始まり，昭和になると工芸指導所の『工芸ニュース』の発行も手がけるようになったことは先述のとおりである。また「正にこれわが工業界あるがまゝの縮図，換言すれば工業百科全書に兼ねるに官公私工業施設一覧，工場会社要録を以て〔中略〕わが工業界の状勢，初めて一目瞭然」となるなどと宣伝されて出版された『日本工業大観』（工学会編，1925）や当時の工業統計概要と主要会社・工場の要覧を付した『工業年鑑』（倉橋編，1926；以後，少なくとも第5版まで継続）などの発行によって，より直接的に「工業関係各団体間の連絡提携・情報の総合」をなした。

一方，工政会において，もう一つ，倉橋が力を注いだのが，「全国工業家大会」の実施と，そこから派生するように開始されていく国産振興運動に関わる取り組みとである。そしてここには，大礼博の「民芸館」が関わってくる。次章では，この国産振興の周辺について，倉橋を中心にみてみたいと思う。

第6章 国産振興運動と「国産博」および「民芸館」

(1) 全国工業家大会と国産振興運動

「全国工業家の啓発覚醒」や「工業関係各団体間の連絡提携・情報の総合」

をその事業に掲げる工政会にとって、重要な活動の一つであったのが、「全国工業家大会」であった。「工業家・技術者の団結を誇示し、親和をはかり、見聞をひろめるといような目的をもつ」たもので、「日本でははじめての企てであった」という（水谷，1947，pp. 14-16）。1924（大正13）年に神戸で第1回が開催されたのち、年に1~2回開催された。第1回開催の数ヶ月前に工政会に入った水谷三郎が、倉橋の指示を受けこの準備にあたったことを回想しているように（水谷，1947，pp. 13-16）、これについてもまた倉橋が多くを取り仕切り実行されたものであった。いくつかの報告講演や工場・事業所などの見学会などが行われ、さらには様々な議題について深く検討する場として「全国工業会議」がもたれた。報告講演で問題点と対策の方向付けが示された上で、「全国工業会議」での自由討論を経て、種々の決議が出され、その決議をもとに様々な政策提言がなされていった（斎藤，1987，pp. 90-94）。

1925（大正14）年、東京で開催された大会での「全国工業会議」において決議された内容の一つに「国産奨励ニ関スル決議」があった。決議の内容は、

- 一、吾人ハ政府ガ權威アル中央機関ヲ設ケ各官公衛及ビ公共団体等ヲ監督シテ国産奨励ノ目的ヲ達成センガタメニ速ニ適切ナル処置ヲ採ランコトヲ望ム
- 二、吾人ハ全国ノ産業及ビ経済ニ関スル公益団体相提携連絡シテ国産奨励ニ関スル一大機関ヲ作り政府ト協力シテ其目的ヲ貫徹センコトヲ期ス（工政会，1926，p. 84）

となっている。この決議を受け、25年11月には国産振興会が設立され、倉橋はその理事を務めることになる。また国産振興会の働きかけから、1926年に商工省内に国産振興委員会が設置され、その後、戦中期にかけて重要性を増していく国産品奨励・振興問題へ連なっていった（斎藤，1987，p.

94)¹⁷⁾。

このあたりの経緯について、倉橋は次のように記している。

大正 14 年 10 月 17 日、東京に開かれた工政会の第 3 回全国工業家大会に於て国産振興に関する決議が行はれ、臨席の商工大臣其他各大臣の熱心なる賛成に基き、大会実行委員の肝煎によって 11 月 18 日東京商業会議所に於ける六団体代表者（東京商業会議所、東京実業組合総合会、工政会、帝国発明協会、日本工業クラブ、日本産業協会）の会合行われ、急転直下して、阪谷芳郎男を会長とする国産振興会の組織となり、〔中略〕着々民論を喚起すると共に、更に官民各関係諸機関と連絡提携して、大阪、名古屋、京都其他の各地方に夫々国産振興会を創立し、政府を動かして国産振興委員会を組織せしめ、遂に此爾 3 年来我国産業界の指導精神となれる国産振興運動の基礎を確立するに至ったのである。（倉橋、1928、p.1）

本稿に関係する大正記念国産振興東京博覧会開催の一つのきっかけとなったのもこの決議であった。続けて倉橋の文章を引いてみよう。

此国産振興会が同〔1925/大正 14：引用者注〕年 12 月 28 日国産振興に関する決議をなし、〔中略〕官民一致して其实行をなさん事を力説せられた。其決議実行をなさん事を力説せられた。其決議には政府の施設に関する事項及官民共同施設に関する事項の二項あるが、其第二項中「国内に於て生産又は加工したる生産品のみの博覧会、見本市等を催すこと」と云う条項に基いて、国産振興会は博覧会特別委員会を設け、大正 15 年早々国産博覧会の計画を樹て、略々成案を得て、之を実行の便宜上東京商業会議所に一任することになった。（倉橋、1928、p.1）

このような計画のもとに、東京に先んじて 1926（大正 15）年秋に大阪においてスタートし、東京、京都ほか 7 都市をめぐった「国産振興汽車博覧会」（六大都市商業会議所主催、商工省後援）や、1927 年の大阪における「国産原動機博覧会」（大阪国産振興会主催）および名古屋での「国産染織工業博

覧会」(愛知国産振興会主催)など専門的博覧会が開催され、そうした「国産博の総論」としてもたれたのが、大礼博であった。

これは、上述の「国内に於て生産又は加工したる生産品のみの博覧会、見本市等を催す」という趣旨のもとに実施された。これには、一つには第一次大戦以降の不況によって打撃を受けた国内(地方)産業の振興という意味合いもあったようだが、もう一つには、一点目に矛盾するようでもあるが、第一次大戦前後期ころからの国内産業の進展とそれに関する自負とがあったと考えられる。主催者側のスタンスとしては、このうち、国内産業に対する自負という面がより強かったようである。倉橋も次のように述べている。

今回は国産品のみの博覧会である。明治10年以来今日迄の博覧会は、常に内国製品と共に外国製品を展示し、しかも皆外国館又は参考館と唱へて場内の呼び物の一とし、寧ろ外国品に宣伝の機会を多く与へるような嫌ひがないでもなかった。産業発達の道程に於て之亦一時の方便として己むを得ないことであるが、日本も既に開国60年、相当外国品に劣らない品物も総ての方面に於て製産され、或いは外国製品の輸入をやめて外国産原料、材料を輸入加工し、却て之を海外に輸出せる状態なるにも拘らず、世間の一部にはなお盲目的に外国品を信仰し、或国内に優良なる製品の製産さるゝ事を知らず、[中略]我々としては此処に国内に於て製産又は加工したる品物のみを陳列展示して、我国産業発達の現状を如実に国民に示すことを必要と感じ、国産品のみに限って出品を認めると云ふ意味に於ては最初の博覧会と催すに至った次第である。(倉橋, 1928, p. 7)

大礼博は、このような流れと意図をもって開催されたものであった。倉橋は、全国工業家大会の開催、そこにおける決議、そして博覧会の開催のすべて、とくにその運営における事務的な諸事に関して、重要な役割を演じていた。それゆえ、大礼博では博覧会事務総長として一定の裁量を発揮できる位置に任じられたわけであり、「民芸館」の出展の依頼も、そうした裁量の一つであったといえる。では、大礼博における「民芸館」の位置付けはどのよ

うであったのだろう。次節以下において、この点を簡単に確認してみたい。

(2) 大礼記念国産振興東京博覧会

明治の後半から昭和初期にかけては、数多くの国内博覧会が開催された時代だった。規模も娯楽性も増していき、例えば、1922（大正11）年に上野で開催された平和記念東京博覧会（平和博）は、1000万人以上の入場者を記録している。また元号の変わり目には、旧元号を、あるいは新元号を記念して、多くの博覧会が開催されるという傾向もあった。大礼記念国産振興東京博覧会も、その名が示すとおり、昭和天皇の即位を記念して開催されたものだった（橋爪監，2005）¹⁸⁾。

大礼博は、東京上野公園を会場に1928年3月24日から5月22日まで開催された。主催は、先に倉橋も述べていたように東京商工会議所国産振興会で、入場者数は、2,233,487人であった。これは、平和博の1103万人、あるいはそれに先んじる1914（大正3）年の東京大正博覧会（大正博）の746万人に比すと、いずれに対しても2ヶ月ほど会期が短いとはいえ、ずいぶん少ない。それでも、大礼博は、東京で開催された博覧会としては、平和博以来の大規模なものであり、倉橋は、開催にあたって「今度は久しぶりに本当の博覧会があるそうですね」という言葉をかけられたことを述懐している（倉橋，1928，p. 1）。博覧会後の事務報告でも、平和博と大正博との入場者の比較などを行っているので、主催者側には、それらに並ぶものであるという自負もあったのだろうと思われる（国産振興東京博覧会，1929，pp. 188-192）。

上野公園竹の台を第一会場として主要パビリオンが、不忍池付近を第二会場に朝鮮館や台湾館、国防館など「特設館」が配置されていた。第一会場入口付近に建てられた万歳塔は高さ45メートルを超えるシンボルタワーで、江戸川乱歩の『黄金仮面』に描写されるほどの話題となった。また水族館や民謡館、演芸館、人類館などが建てられ、これらでなされた様々な余興は大

第2表 倉橋藤治郎 編著作一覧

[単著]					
	出版年	書名	出版社	頁数	共著編者
1	1920	『京都陶業の立脚点を論じ将来に及ぶ』	倉橋藤治郎	6p	
2	1926	『工業教育の研究』	工政会出版部	118+8p	
3	1930	『大礼記念国産振興東京博覧会について』	倉橋藤治郎	17p	
4	1933	『北平の陶器』	工政会出版部	67p 図版 16枚	
5	1938	『墨西哥事情：有望なる邦人所有の油田』	日本外交協会	99p	
6	1942	『長野縣の實業教育』	實業教育振興中央会	39p	
7	1943	『日本工業概論』（第1巻）	工業図書株式会社	273p	
8	1944	『實業教育論』	工業図書	251p	
[単編著]					
9	1926-30	『工業年鑑』	工政会出版部		
10	1931	『日本工業大観（普及版）』	工政会出版部	758+13p	
11	1932-33	『陶器図録 第1-9』 第1 李朝白磁 / 第2 鉅鹿出土陶 / 第3 油皿 / 第4 李朝鉄砂 / 第5 李朝辰砂 / 第6 古唐津 / 第7 天啓赤絵馬の皿 / 第8 李朝水滴 / 第9 古九谷	工政会出版部		
12	1934	『古唐津：古陶器大圖録』	工政会出版部	彩壺会藏版，解説：第1輯(8p)，第2輯(7p)	
13	1935	『朝鮮陶器の鑑賞』	彩壺会，工政会出版部	26p，浅川伯教述；倉橋藤治郎編輯	
14	1937	『電気化学工業最近の進歩』	工業図書	280+14p	

15	1937-38	『化学工業最近の進歩 (再版) (上・下)』	工業図書		
16	1938	『電気工学最近の進歩』	工業図書	221p	
17	1938	『人絹工業最近の進歩』	工業図書株式会社	227+11p	
18	1938	『工作機械最近の進歩』	工業図書株式会社	226+10p	
19	1939	『土木工学最近の進歩』	工業図書株式会社	215p	

[共著・共編著]

20	1924	『帝都土地区劃整理に 就て』	工政会	79p	工政会編
21	1928	『財団法人啓明会講演 集 第29回』	啓明会事務所	70+9p	矢吹慶輝 (共著)
22	1931	『手織綺手本帖』	工政会出版部	全10輯	倉橋藤治 郎ほか編
23	1931	『黄八丈手鑑』(第1輯)	工政会出版部, 茜屋 書房	図版20枚	秦秀雄 (共編)
24	1932	『呉須赤絵大皿』	工政会出版部	8p	青山二郎 (共編)
25	1932	『古九谷』(第1輯)	工政会出版部	8p	青山二郎 (共編)
26	1934	『最新日本工業通論』(實 際經濟問題講座: 第6巻)	平凡社	335p	畑石輝治 (共著)
27	1934	『(啓明会講演集 第55 回) 朝鮮の陶器』	啓明会		浅川伯教 (共著)

きな人気を呼んだという。

(3) 大禮博の「民芸館」

このなかで「民芸館」はどのような位置にあったのだろうか。第3表は、主な施設の建坪数、工事費をまとめたものである。ここには特設館が含まれ

第3表 大礼博における各施設の坪数・工事費一覧（一部）

名称	坪数	工事費（円）
東1号館	605.0	125700.00
東2号館	390.5	
西1号館	495.0	
西2号館	200.0	
西3号館	990.0	
西3号館別館	319.0	
大礼記念館及付属家	190.0	40958.00
工業研究館	100.0	2500.00
民芸館	25.0	10189.50
航空館	351.0	26133.32
事務館	337.0	15900.00
万歳塔及誘導列柱		13090.00
正門	50.0	4320.00
音楽堂	70.0	7900.00
第二会場演芸館	102.0	7054.72

注)「民芸館」の坪数は「35.0」の誤り

資料) 国産新興東京博覧会編 (1929), pp. 188-192.

ていないのだが、「民芸館」は、主要な施設、パビリオンのなかでは一際小さい施設であったことが分かる。その一方、工事費の10,189.5円は、大きくはないにせよ、施設の規模を考えると一定の費用をかけて建てられたものであるといえそうである。

『事務報告』では、その建物は次のように評価されている。

本館は柳宗悦氏の設計に成り、西三号館に隣して建築した。本造平屋建建坪



第1図 「正門より大礼記念館を望む」(絵はがき)

25坪〔35坪の誤り：引用者注〕にして、屋根切妻瓦葺軒高10尺、純日本式古風の建物にして、床は板張畳敷き、土間土の叩きとした。外部は柱を建に現はし、出格子窓等を付け、玄関扉其他戸障子襖畳諸道具に至るまで、全部古風の日本式を發揮したるものである。(国産振興東京博覧会, 1929, p.207)

博覧会は、いまに至るまで多くの場合、「近未来的」という形容が当てはまりそうな非日常的なデザインのパビリオンがひしめく場となるが、アールデコや未来派の影響を受けた建築が立ち並んだ大礼博においてももちろん同様であった(例えば、第1図)。そうしたなか、「純日本式古風」あるいは「古風の日本式」を目指して建てられたという「民芸館」は、メインストリームからは大きく離れた異質なパビリオンであったに違いない。「民芸館」が建てられたのは、裏門にほど近くの位置であった。管見の限り絵はがきなどには描かれていないようなので、博覧会を代表する、あるいは大人気の、パビリオンであったわけではなさそうである。ただし裏門の近くとはいえ、付近

は、東1・2号館、西1～3号館、大礼記念館など会場の中心の場所でもあったので、決してひっそりと建っていたわけではないだろう。こうした場所の選択にも倉橋が力を発揮していたという記述もある。

〔「民芸館の」：引用者注〕敷地については倉橋氏が博覧会の総裁・藤山雷太商工会議所会頭と膝詰談判し、会場である博物館のいちばん場所のいい空地进行獲得した。倉橋氏は音に聞こえた「強心臓。で、この敷地問題にさきだち藤山会頭に「わしを博覧会の事務総長になさい。必ず成功させてお目にかける」と売り込み、藤山氏を煙にまいて、ついに事実、事務総長になってしまった男である。民芸館の敷地交渉くらい朝めし前だったに違いない。（山本為三郎翁傳編纂委員会編、1970、p.297）

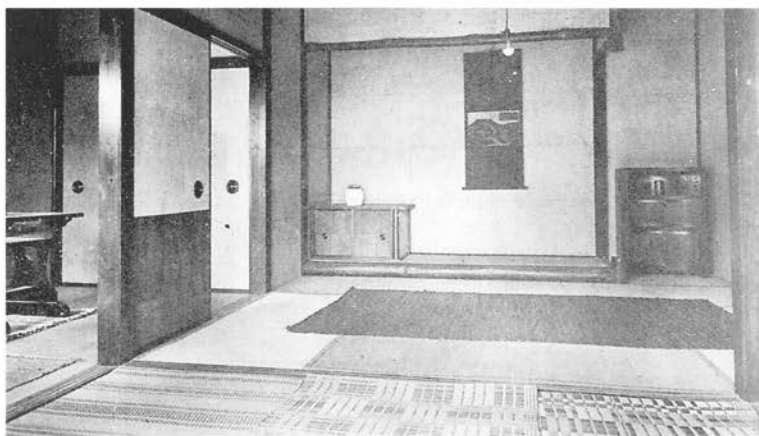
この記述をそのまま受け取るわけにはいかないが、場所の選定について何らかの配慮をなしたことは十分に考えられる。とはいえ、そのように中心近くであったがゆえに、むしろ、その建築物の異質性が際だっていたということもあったかもしれない。

第2図、第3図は、大礼博での「民芸館」の写真である。大礼博の「民芸館」については多くの写真は残っていないようで、比較的流通しているものとしては、『工芸』60号に掲載されている2枚の外観写真があるくらいであろうか¹⁹⁾。他にみられるこの建物の写真は、三国に移築されてからのもの、すなわち三国荘のものとなっている。第2図は「民芸館」の外観であるが、よくみると、建物の裏手に、少々派手なデザインの「工業研究館」の看板を確認できる。他方、第3図は室内（「主婦室」であろう）の写真であるが、三国荘に関してよく知られているものに比べると²⁰⁾、ずいぶんシンプルにみえる。「中流階級の人々の住み得る家」というプランゆえであろうか。派手になりがちな博覧会のなかで、こうした点もまた異質な点であったかもしれない。

柳たちは、ここに自らが蒐集した地方の手工芸や、「上加茂民芸協団」の黒田辰秋（1904-1982）や青田五良（1898-1935）らによる作品²¹⁾、河井や



第2図 大礼博の「民芸館」(外観)



第3図 大礼博の「民芸館」(内部・主婦室)

資料) 西島編 (1928), p. 157. (第2図とも)

濱田らによる作品などをレイアウトして提示した。博覧会后に刊行された公式の資料のなかで、柳自身はこの施設について次のように解説している。

第一会場の民芸館は、中流階級の人の住み得る家を目的とし、其の中の調度一切と日本の諸方に散在してゐる民芸品を集めて陳列したのである。一脚の椅子にせよ机にせよ我々が思ひも付かぬ処に、思ひもつかぬ優秀なものを発見することがある。それを世間の人には知らずに居る、かうした立派なものありながら流行り舶来品など並べて得々として居る、それがどうも面白くない开でなほ品物に適当なものゝない場合は新にデザインして、これに加へた、座敷の道具から台所用具までゝあるから随分広汎で、其狩集めに全国を巡回してしまつた、又中には特殊の人々に依つて製作されたものもあり、採集されたものある、クッションの如きは京都の同志社中学の青田氏が上加茂で同志と共に織つて居るもので極めて芸術的なものであり、陶器などは河合寛治郎君や濱田庄司君が熱心に集めたもので、濱田君の如き現に琉球にあって之れが採集に熱中して居る、日本にもこんな民芸がある、其れを日常生活に以下に利用し得るかこんなことを知らせるものよい機会であらう、場所は第1会場の西北隅で、建坪36坪〔35坪の誤り：引用者注〕の7室、費用は六千円程かゝつた。(柳、1928、p. 157)

これによれば、各地の「民芸品」を蒐集するなかで、彼らが「思ひも付かぬ処に、思ひもつかぬ優秀なものを発見することがある」が、しかし「それを世間の人には知らずに居る、かうした立派なものありながら流行り舶来品など並べて得々として居る、それがどうも面白くない」という。そしてそれを知らしめるために、「中流階級の人の住み得る家を目的とし、其の中の調度一切と日本の諸方に散在してゐる民芸品を集めて陳列した」とある。こうした意図は、主催者へのリップサービスがあるにせよ、先に倉橋の文章から紹介した、大礼博の目的にも合致するところであつただらう。実際に公式の評価も好意的なものであつた。

本館は当博覧会協会が柳宗悦氏等日本民芸美術館同人諸氏に依頼して完成したもので、建坪 35 坪の平屋住宅に、日本領土内各地の民衆的工芸中、用と美と廉価の 3 条件を具備せるものを集めて、各室に配置し、家屋と建具及道具等の総合と統一を実際に示した。此の施設は従来多くその例を見ない所で、生活改善の上にも一つの指針となり、而かも国産を奨励すべき施設であって、予想以上の効果を収めた。(国産振興東京博覧会, 1929, p. 377)

「国産を奨励すべき施設であって、予想以上の効果を収めた」とあるように、「民芸館」は国産振興という博覧会の目的を十二分に満たす施設として評価されたらしいことが伺える。民芸運動が、のちに地域の産業振興策の一つとして認識される場合もあったことを考えると、それは当然の評価であったともいえる。先に柳の文章を引いた『出品大観』にも次のようにある。

これは柳宗悦氏等の日本民芸美術館同人が博覧会囑託の下に作り上げたもので、[中略] 柳氏等は日本の領土内を隈なく旅行して到る処から健全な民芸品、用と美と廉価との一致せる品を集め、之を収めたるために 35 坪の民家を建て、兎角切放されがちの家屋と建具、道具等の総合、統一を図った生活改善の上からも国産振興上からも大変意義の深い計画で、此れ亦従来の博覧会に例を見ないところであった。(西島編, 1928, p. 63)

しかしながら、機械産業と娯楽とが中心となった博覧会において、「民家風」のこの建物が異質であったこともまた容易に推測できることでもある。『出品大観』の「従来の博覧会に例を見ない」という評価も裏を返せば、「変わったもの」という事でもある。試しに、より一般的な評価を示しているであろう資料として、『アサヒグラフ』の記念号をみてみよう。『アサヒグラフ』では、「臨時増刊」として『大礼記念博覧会号』が発行されている。会期中の会場の画像をふんだんに掲載した、大変興味深いものである。

「民芸館」については、「第一会場 その十」として来場者が写り込んだ写真が掲載されている。そのキャプションには、「柳宗悦氏が力を入れた農民

生活や農民芸術をみせた、瓦葺きの変わった建物です」とある（東京朝日新聞社、1928, p. 26）。ここに「変わった建物です」とあるように、博覧会会場にあって、やはりこれは異質なものであったことが伺えるわけである²²⁾。

先に、大札博が国内産業生産品の振興を主とした博覧会であった旨を述べた。よって、その主役はむろん工業製品であったわけだが、他方で、ここには他の博覧会と同様、手工芸も含む各地の様々な産物も出品されていた。例えば第1会場の西1～3号館は、府県ごとの物産を陳列しており、そこには織物や漆器、陶器などの多くの工芸品が含まれている（西島編、1928, pp. 59-63）。また「農民芸術」的な方向性をもったものとしては、「演芸館」において各地の民俗芸能が多数上演され人気を博したといった出来事もあった。その意味では、「民芸館」が提示したものそれ自体は、殊更に「変わった」ものではなかった。

しかしながら、特定の地域や特定の製品の展示施設ではなく、いわゆる娯楽施設でもなかった、「民芸館」というパビリオンは、やはり他の施設とは異なった「変わった」ものであったに違いない²³⁾。そして注目すべきは、そうした「変わった」パビリオンを、このような大規模な博覧会に、しかも主催者からの依頼という形で出展させてしまった倉橋の考え方とその腕力・実行力であろう。

ところで、この博覧会における「民芸館」の位置付け方は、ある面においては、先にみた大正期の京都陶業界における小森、河井、濱田らの位置に近いものでもあったのではないだろうか。そこでみられたのは、一つには、「東洋」や「日本」へ「帰りつゝある」（I-31, p. 357）なかで、それに呼応するように、彼らがみせた作品や実践であり、またもう一つには、産業に軸足を置きつつも、美術との境界から出てきた新しい展開への注目である。倉橋が、「民芸館」あるいは民芸運動にみた興味もまた、河井や濱田へのそれから比較的ストレートに引き継がれたものではなかったか。すなわち、「美術」「産業」「日本（国産）」という彼が関心を示した三項すべてをつなぎ合わせ

るようなものとしての可能性をである。

大礼博における「民芸館」とは、この時点までの運動の一大成果であったことは間違いないが、その場を与えたのは、産業によりつつ美術との間を横断する視野をもった倉橋藤治郎という存在であったということは、確認しておいてよいことであろう。長田謙一は、この博覧会への参加によって、国産振興（あるいはより広いナショナリズム）の文脈にのったことが、民芸運動のその後の進展に大きな意味をもったことを指摘している（長田、2006b, pp. 394-350）。大礼博での「民芸館」は、単に「民芸運動の原点」に止まらない意味ももっていたことは間違いないことであろうし、そのきっかけとなった、倉橋のまなごしもまた同様だろう。おそらくそれは、「民芸運動の……」という括りを超えて注目してよいものであったはずである。

第7章 その後のこと—おわりにかえて—

このように、民芸運動の胎動期において非常に重要な関わりをもっていた倉橋であるが、大礼博以後は、目立った関係はみられなくなったようである。もちろん、河井や濱田ら、とくに濱田との交流は継続されており、少なくとも1930年代の半ばまではそれなりに密であった²⁴⁾。また『民芸叢書』などの出版も、倉橋が工政会にいた時期までは継続していた。しかし、1930年代後半以降の状況は、現状、把握できていない。このあたりについては今後の課題の一つとしたい。その上で、そののちの倉橋の活動について少しだけ触れておく。

第2表からも確認できるように、1930年代になると、多くの著書・編著・共著・共編著を著すようになっていく。とくに30年代後半には、『電気化学工業最近の進歩』、『電気工学最近の進歩』など当時の産業界の状況と今後への展望をまとめた著書を多く出版し、国内産業界に対するある種の啓発活動に力を注いでいる。他方、30年代の前半には、倉橋を古陶磁器鑑賞の「チャ

ンピオン」とせしめたであろう、陶磁器に関するいくつかの著書を見ることが出来る。例えば、1932-33年の『陶器図鑑』や、北平（北京）の滞在記でもある『北平の陶器』、あるいは青山二郎との共著のものなどは、重要な成果であったろう。

このなかで『陶器図鑑』は、1冊について20点の図版を掲載し、その解説をするもので、「此シリーズは月に10冊も出すように吹聴しておいた」（II-11 [第3 油皿]）というほどの企画であった。刊行予定となっているものをみていくと、「支那」^(ママ)「朝鮮」「日本」「外国」「用途」「器の部分」「器の模様」「陶業地」「製陶技術」「陶器研究家名鑑」という大項目の下に、100冊を超えるシリーズを予定していたようである²⁵⁾。しかしながら、結局、刊行されたのはわずか9冊であった（管見の限り）。刊行されている分をみる限り、掲載される作品の多くは倉橋の所蔵となっているので、計画通り刊行が進めば、そのコレクションの全貌を把握することもできたのかもしれない。

計画が早々に頓挫してしまったのには、「何分私が御承知の通りむやみにいそがしいのと、こんな小さなものとはばかり軽く考へてゐたのが、さてとなるとやはり世間に対する責任を感じ、野次だ々々と調子を外しながら、相当に写し直したり、やり直したりで、最初の懸声ほどには仕事が進まない」（II-11 [第3 油皿]）と自ら述べているように、当人の多忙および大きすぎる計画とがあったようである。

しかし一方で、工政会の内部における倉橋の立場の変化という要因もあったようである。先に参照した『山本為三郎翁伝』に「わしを博覧会の事務総長になさい。必ず成功させてお目にかける」との倉橋の言葉があった。実際にそのように発言したか否かは不明ではあるが、1000万人超の入場者を見た平和博が大きな赤字となったのとは対照的に、倉橋が実務を仕切った大礼博は、本人の発言とされている言葉のとおり、十分な黒字を出し成功裡に終わったという。これに味を占めてというわけではないだろうが、工政会では続いて新たな博覧会を企画・実施した。1933年3月17日から5月10日まで、

やはり上野公園を中心に実施された「万国婦人子供博覧会」（主催 大日本婦人連合会・工政会）がそれである。大礼博同様の成功を狙ったが、結果は大きな赤字を残したものとなったという。倉橋は、その批判の矢面にたたされたらしい。1933年に出版された『北平の陶器』の「序」には次のようにある。

私は此春、嵐の、まん中に立ってゐた。今春、東京に開かれた婦人子供博覧会は、列国デーを催したり、ドイツのカール・ハーゲンベック大サーカス団をよんだりして、昭和8年東京の春を明るくする催しであり、又非常時日本の国民外交としても有意義な計画であったが、例によって、他人の仕事にケチをうけて欣ぶ、さもしい人達等によって、存分うるさい目にも会い、つくゞ日本の人口過剰、精神衰弱を感じた事であった。(II-4, p.1)

かなり困難な状況に置かれていたらしいことが分かる。結果、倉橋は、この失敗の責任をかぶることになるが、その対策としてなされたのが、実は彼のコレクションの売立てだった。1933年12月1日から4日まで、日本橋高島屋美術部で行われた「東洋古陶器大展覧会」がそれであったようである。その図録には、倉橋の名前はみることができないが、それまでの著作で倉橋蔵となっているいくつかの作品が含まれることから、これが当該の売立てであったことはほぼ間違いないと思われる（東京日本橋高島屋美術部、1933）²⁶。「曾て陶器美術館たらんとする目的を以て始められた此有名なる蒐集三千点、内一千点は淘汰整理され、更に四百点は純然たる参考品として除かれ、こゝに千六百点が今回展観され、同好者に頒たれると云う事は、余りに突然且意外であると同時に、それだけ古陶器鑑賞趣味の世界では近年稀有の決心事であります」（東京日本橋高島屋美術部、1933, p.3）という、なかなかの規模の売立てであったようである。「余りに突然且意外」なものであった事の背景には、先の博覧会の失敗があったと考えられるわけであるが、この売立てによって、その折の負債はおよそ整理できたという。しかし、こうした一連の事態をうけて、倉橋は工政会も退くことになっている。『陶

器図録』の刊行が頓挫した理由には、同時期に倉橋を取り巻いたこうした状況も関係していたに違いない。

工政会を退いて以後の倉橋は、むろん「陶器鑑賞の四天王」でもあり続けたのだろうが、それ以上に出版人としての仕事が増えていく。また先にみたように著作も「産業」に主軸をおいたものが中心となっており、1930年代中期以降のそうした彼の活動からは、陶器鑑賞や、かつての民芸運動への支援、河井や濱田との交流の影をみるのが難しいようにさえ見える。工政会からの離脱や戦中戦後の混乱を経たのちに、果たして倉橋は、陶器や民芸の世界に戻っていったのだろうか。興味深い点ではあるが、それは、戦後ほどなくの彼の死によって、知ることができなくなってしまった。

他方、倉橋が関わったいくつかの動きは、1930～40年代にかけて、独自の発展を遂げていった。工政会時代に心血を注いだ国産振興運動は、戦時体制下においてますます重要性を獲得し、「明治の舶来、昭和の国産」というスローガンのもと、全国的な展開をみせるようになっていった（社会局・臨時産業合理局、1931；内閣・内務省・文部省、1937など）。またここで注目した民芸運動も、新体制下の状況にも関わりをもちつつ、その勢いを拡大し、河井や濱田らも個人作家としての地位を確たるものにしていった。このようにそれぞれの動きが大きく展開していくなかで、工政会を退き、コレクションを整理してしまったことに加え、なによりも早すぎる死を迎えてしまったことが大きな要因となり、その後、倉橋の存在とその意義がふり返られる機会は極めて少なくなってしまったようである。

しかしながら、本稿でも大雑把にふり返ってきたように、例えば民芸運動の周辺に彼が与えた影響は非常に大きい。また近年関心が注がれつつある、美術と産業との狭間にみる彼の存在も興味深いものである。それらについて厳密に検討するには、本稿は概略的に過ぎるものであったが、これを足がかりに今後のより分析的な考察へとつなげていきたいと考えている。

注

- 1) 本稿で「民芸館」とカギ括弧付きで記すのは、すべて大礼博のパビリオンであった「民芸館」を指す。ちなみに、現在も東京駒場にある日本民芸館の開館は、1936年のこと。
- 2) 山本家のコレクションの一部は、現在、京都のアサヒビール大山崎山荘美術館に引き継がれている。それらを中心に2006年8月から12月にかけて、同館において開催された「民芸の原点 三国荘展」は、まさにこの二つの点に注目したものであった。
- 3) ちなみに、柳はこれら三国荘に関する一連の文章において、博覧会の名称を「御大礼記念国産振興博覧会」と述べている。そのためか、現在に至るまで民芸運動の周辺では、この呼称が用いられ続けているが、博覧会の正式な名称は、「大礼記念国産振興東京博覧会」であることを指摘しておきたい。
- 4) 批判の内容については吉田(1995)も参照のこと。
- 5) 以下、倉橋の著書および『大日本窯業協会雑誌』掲載の文章の書誌は、第1表および第2表を参照のこと。文中には、それぞれ、I-1, I-2…、II-1, II-2…と表掲載の番号と当該頁数のみを括弧書きで示し、これらについては、文献一覧には含まないこととする。
- 6) 小野賢一郎(1888-1943)は、雑誌『茶わん』の発刊や『陶器大辞典』の編纂などを手がけた、陶器鑑賞の重鎮の一人。
- 7) 倉橋の経歴については、筆者の調査不足ゆえ、不明な部分も多い。ここでは、現状で把握している範囲で示した。またその情報の多くは、ともに倉橋のもとで仕事をしていた水谷三郎と笠原洪平の回想録から得ている(水谷, 1947; 笹原, 1989)なお、秦(1932, p. 36)には、倉橋が「帝大理学部」を出ているとの記述があるが、この点については、確認できていない。
- 8) 小森忍については、松下(1991)を参照のこと。また第I章においても述べたように、近年、美術とその周辺との関わりへの関心が高まっているが、その流れを受け、小森の再評価も進められているようである。生誕120年となった2009年には、江別市セラミックアートセンターを皮切りに、巡回展が企画された(江別市セラミックアートセンターほか編, 2009)。
- 9) 徳永硝子は、一度完全に山為硝子製造所に移譲されたが、その後、再度、山為硝子から分離し、復興している。この2社に大阪製壺を加えた3社が、

大阪の壺業界における三大メーカーであったという。

- 10) 同書には細かな事実の誤認が少なくないようでもあるが、とりあえずここではこれを採用しておく。
- 11) この点については、別稿を準備中である。
- 12) 小森は、大阪高等工業学校窯業科卒業後、大阪府堺煉瓦株式会社を経て、1911（明治44）年に陶磁器試験場に就職し、1917（大正6）年まで勤務している。河井は、東京高等工業学校窯業科を卒業後、1914（大正3）年に入所、小森と同じく1917年に辞職。濱田は、河井と同じ東京高等工業の窯業科を卒業後、1916（大正5）年に入所、1920（大正9）年まで勤務している。同試験場には、ほかにも、近藤悠三（1902-1985）や楠部彌弼（1897-1984）など、のちに陶芸家として大成する人々が助手や伝習生などとして在籍していた。
- 13) 当時の京都市陶磁器試験場については、鎌谷（1987）を参照のこと。
- 14) この点については、大阪市東洋陶磁美術館の小林仁氏に示唆を受けた。
- 15) 小森は、1910（明治43）年に大阪高等工業を卒業後、堺煉瓦株式会社というところに8ヶ月ほど努め、1911年4月に陶磁器試験場に就職しているが、この時に、藤江の「骨折り」があったと推測されるという。
- 16) 『工政』誌上の倉橋による論考は、数が多く、形式も多様であることから、とりあえずここでは一覧としてまとめることはしない。関連の文献のみ、他の文献と同様に示すことにしたい。
- 17) その展開の一端は、例えば、国産振興会編（1927）、倉橋編（1927）などを参照のこと。
- 18) 本稿での博覧会データは、他所でも多く、橋爪監（2005）によっている。
- 19) 『工芸』第60号（1936）は、三国荘の特集号であり、ここに三国荘の内外の写真とともに、2枚の「民芸館」の外観写真が掲載されている。写真は、『柳宗悦全集』第16巻にも再録されている（柳，1981，p.38）。また、冒頭で触れた「生活と芸術」展の開催にあわせて、発行された小冊子『三国荘を語る』（朝日新聞社事業本部文化事業部・アサヒビール大山崎山荘美術館編，2009）にも、同写真のうち1点が再録されている。同冊子には、「生活と芸術」展での再現展示も含め、『工芸』第60号収録の三国荘の写真も多く収録されているので、参照のこと。
- 20) 『工芸』第60号に掲載の三国荘での「主婦室」には、仙台筆筒ほか、黒田辰秋作の朱塗の円卓や戸棚、濱田作の火鉢などがおかれ、ランプシェードも

つけられている。

- 21) 上加茂民芸協団は、柳の民芸理論の実践の場として1927年に組織された小さな工芸家ギルドであり、青田、黒田のほか、青田七郎、鈴木實などが参加した。経済的な問題や女性問題などが原因ともなり、2年ほどで解散してしまう（小谷、2004を参照のこと）。
- 22) 柳たち自身も、その「異質性」を認識していたようで、「民芸館」が、「傍らに聳えている近代風な西洋式な、そうしてあの一時的な博覧会式の建物と何の縁があるかを不思議がられるであろう。見ればその中に並べられた品物も見慣れないものばかりである。[中略]なぜか、るものが出品されたか、企画されたか、その道の人でなくば、うなづき難いであろうから」として、大礼博の折にその趣旨を記したという（柳、1936, pp. 7-8, その当時の趣旨文自体は未見）。
- 23) この「変わった建物」は、建築界においてもほとんど無視されたいが、そのなかで堀口捨己（1895-1984）は、これを好意的に評価していたことが、川島によって指摘されている（川島、2008, p. 211）。
- 24) 例えば、1931年には、『茶わん』誌上で濱田の住まいのある栃木県益子への訪問の企画がたてられ、小野、秦らとともに倉橋もこれに参加していることが知れる（ハタ生 [秦秀雄のこと], 1931; 松柏生, 1931）。
- 25) 秦は、これについて、「今度はコロタイプと原色版入りの陶磁図版集が円本で出されるとかで、今数百冊の編輯が人知れず行われているらしい」と述べている（秦、1932, p. 39）。
- 26) ちなみに、2008年冬のえびな書店の古書目録にこれが掲載されており、そこには「倉橋藤治郎の売立目録」との説明が付されていた（書架81, 2008, p. 245）。

参考文献

- 愛知県陶磁資料館 学芸課編（2009）『ジャパニーズ・デザインの挑戦—産総研に残る試作とコレクション—』愛知県陶磁資料館。
- 青木啓将（2009）「日本刀剣界の〈美術〉性をめぐるせめぎ合い—岐阜県の「関の刀匠」の日常的実践—」, 日本民俗学 260, pp. 1-34.
- 赤坂表三（1926）「工政会の近状を論じ新春の工業界に寄す」, 工政 74, pp. 13-

21.

- 朝日新聞社・京都国立近代美術館ほか編（2008）『生活と芸術—アーツ&クラフツ展』朝日新聞社.
- 朝日新聞社事業本部文化事業部・アサヒビール大山崎山荘美術館編（2009）『三国荘を語る』朝日新聞社.
- 江別市セラミックアートセンターほか編（2009）『生誕一二〇年記念 小森忍 日本陶芸の幕開け』「小森忍展」実行委員会.
- 小谷二郎（2004）「青田五良と上加茂民芸協団」, デザイン史フォーラム編『アーツ・アンド・クラフツと日本』思文閣出版, pp. 71-80.
- 鎌谷親善（1987）「京都市陶磁器試験場—明治二九年～大正九年—（一）（二）」, 化学史研究 1987 年号, pp. 97-115, pp. 147-163.
- 川島智生（1998）「三国荘の発見」, 民芸 548, pp. 14-22.
- 川島智生（2008）「最初の「民藝館」三国荘—「民芸建築」の出発点—」, 朝日新聞社ほか編『生活と芸術—アーツ&クラフツ展』, pp. 209-217.
- 熊倉功夫（1997）『近代数寄者の茶の湯』河原書店.
- 倉橋藤治郎（1924）「工政会の発展とその将来」, 工政 55, pp. 39-42.
- 倉橋藤治郎編（1926）『工業年鑑』工政会出版部.
- 倉橋藤治郎編（1927）『国産振興資料 VI 重要産業振興策』国産振興会.
- 倉橋藤治郎（1928）「大礼記念国産振興東京博覧会について」, 工政 101, pp. 1-10.
- 倉橋藤治郎（1931）「陶界鳥瞰図」, 茶わん 1-8, pp. 27-32.
- クリフォード, ジェイムズ（2003）「部族的なものと近代的なものの歴史」, クリフォード『文化の窮状』人文書院, pp. 245-272.
- 工学会編纂（1925）『日本工業大観』工政会出版部.
- 工政会（1926）「決議」, 工政 75, p. 85.
- 工政会（出版年不明 [1933 ころ]）『社団法人工政会 沿革・事業・定款・役員』社団法人工政会.
- 国産振興会編（1927）『国産振興委員会 第四会総会会議録』国産振興会.
- 国産振興東京博覧会編（1929）『大礼記念国産振興東京博覧会事務報告』国産振興東京博覧会.
- 笠原洪平（1989）『ささやかな回想』修学館.
- 斎藤憲（1987）『新興コンツェルン理研の研究』時潮社.

- 白洲正子（1991）『いまなぜ青山二郎なのか』新潮文庫。
- 社会局・臨時産業合理局（1931）『国産愛用運動概要』社会局・臨時産業合理局。
- 松柏生（1931）「益子ゆき雑感」, 茶わん 1-6, pp. 46-47.
- 土田真紀（2005）「「工芸」の課題—柳宗悦の視点から—」, 熊倉功夫・吉田憲司編『柳宗悦と民藝運動』思文閣出版, pp. 220-249.
- 東京朝日新聞社（1928）『アサヒグラフ臨時増刊 大礼記念博覧会号』東京朝日新聞社。
- 東京日本橋高島屋美術部（1933）『我邦最初の系統的、本格的な東洋古陶器大覧会図録』東京日本橋高島屋美術部。
- 内閣・内務省・文部省（1937）『国民精神総動員資料五輯 国産振興と国産愛用』内閣・内務省・文部省。
- 長田謙一（2006a）「はじめに」, 長田謙一ほか編『近代日本デザイン史』美学出版, pp. 5-11.
- 長田謙一（2006b）「「美の国」NIPPON とその実現の夢—民芸運動と「新体制」—」, 長田謙一ほか編『近代日本デザイン史』美学出版, pp. 348-370.
- 長田謙一・樋田豊郎・森仁史編（2006）『近代日本デザイン史』美学出版。
- 成田龍一（2007）『大正デモクラシー』岩波新書。
- 西島染之助編（1928）『国産振興東京博覧会出品大観』大礼記念国産振興東京博覧会出品大観刊行会。
- 橋爪紳也監修（2005）『日本の博覧会 寺下勅コレクション』平凡社。
- ハタ生（1931）「益子遊記」, 茶わん 1-6, pp. 45-46.
- 秦秀雄（1932）「工芸界人物春秋（二） 倉橋藤治郎論」, 茶わん 2-2（12）, pp. 36-39.
- 秦秀雄（1962）「「わが陶師・陶友」（四） 倉橋藤治郎」, 陶説 114, pp. 75-78.
- 濱田琢司（2003）「民芸と民俗—審美的対象としての民俗文化—」, 日本民俗学 236, pp. 127-136.
- 濱田琢司（2005）「濱田庄司の沖縄—「ゲテ」の中に自己を生かす—」, 横堀聡編『沖縄と濱田庄司展』, 益子町文化のまちづくり実行委員会, pp. 10-31.
- 不二生（1914）「一筆啓上仕候（六） 京都にて」, 大日本窯業協会雑誌 266（第23集）, pp. 70-72.
- 松下亘（1991）『小森忍の生涯』江別市・江別市教育委員会。
- 真鍋昌賢（2006）「民俗学史における問題としての「芸術」—特集にあたっての

- 序言一], 日本学報 (大阪大学) 25, pp. 1-7.
- 水尾比呂志 (1992) 『評伝 柳宗悦』筑摩書房.
- 水谷三郎 (1947) 『倉橋さんの憶い出』(自費出版).
- 森仁史 (2009) 『日本<工芸>の近代 美術とデザインの母胎として』吉川弘文館.
- 柳宗悦 (1920) 「余の知れるリーチ」, 美術写真画報 1-1. (「修正版「私の知れるリーチ」(1928)として、『柳宗悦全集 第一四巻』筑摩書房, pp. 83-93.)
- 柳宗悦 (1928) 「生活の芸術化をみせた民芸館について」, 西島編『国産振興東京博覧会出品大観』, p. 157.
- 柳宗悦 (1936) 「三国荘小史」, 工芸 60, pp. 1-21.
- 柳宗悦 (1981 [1936]) 「挿絵小註 [『工芸』第 60 号]」, 『柳宗悦全集 第 16 巻』筑摩書房, pp. 28-38.
- 柳宗悦編 (1927) 『雑器の美』工政会出版部.
- 山田雄久 (2003) 「明治中期における日本陶磁器業の情報戦略—大日本窯業協会の海外伝達活動—」, 徳永光俊・本多三郎編『経済史再考 日本経済史研究所開所七〇周年記念論文集』大阪経済大学日本経済史研究所, 3pp. 23-339.
- 山本為三郎 (1980 [1957]) 「私の履歴書」, 『私の履歴書 経済人二』日本経済新聞社, pp. 97-143.
- 山本為三郎翁傳編纂委員会 (1970) 『山本為三郎翁傳』朝日麦酒株式会社.
- 吉田憲司 (1995) 「「事件」としての展示と出版:「20 世紀美術におけるプリミティヴィズム」—日本語版「あとがき」として—」, ルービン, ウィリアム編『20 世紀美術におけるプリミティヴィズム I・II』<日本語版のための補遺編> 淡交社, pp. 4-7.
- Livingstone, Karen & Linda Parry ed. (2005) *International Arts and Crafts*, V&A Publications, 2005.

大日本窯業協会・工政会の倉橋藤治郎と 胎動期の民芸運動

——美術と産業の間への視線——

濱田 琢司

要 旨

民芸運動の最初期の支援者の一人であった倉橋藤治郎は、大日本窯業協会や工政会といった組織をはじめ、産業界・実業界の各方面に力を発揮する一方で、陶器鑑賞界の「四天王」と目されるほどの目利き・陶器蒐集家としても知られた人物であった。しかし、大正から昭和初期にかけて、そのように活躍した人物でありながら、近年、民芸運動史においても倉橋が振り返えられることはほとんどなくなっている。本稿では、この倉橋藤治郎について、とくに、運動創始以前からの関わりも含めた胎動期の民芸運動との関係に注目しつつ、彼が、なぜ、どのように、民芸運動の周辺に注目するようになったのかを確認する。その上で、美術と産業との境界領域に注目し、そこから戦前期の産業政策の一つである「国産振興運動」へともつながっていく、倉橋の思想と実践の一端を紹介・検討する。